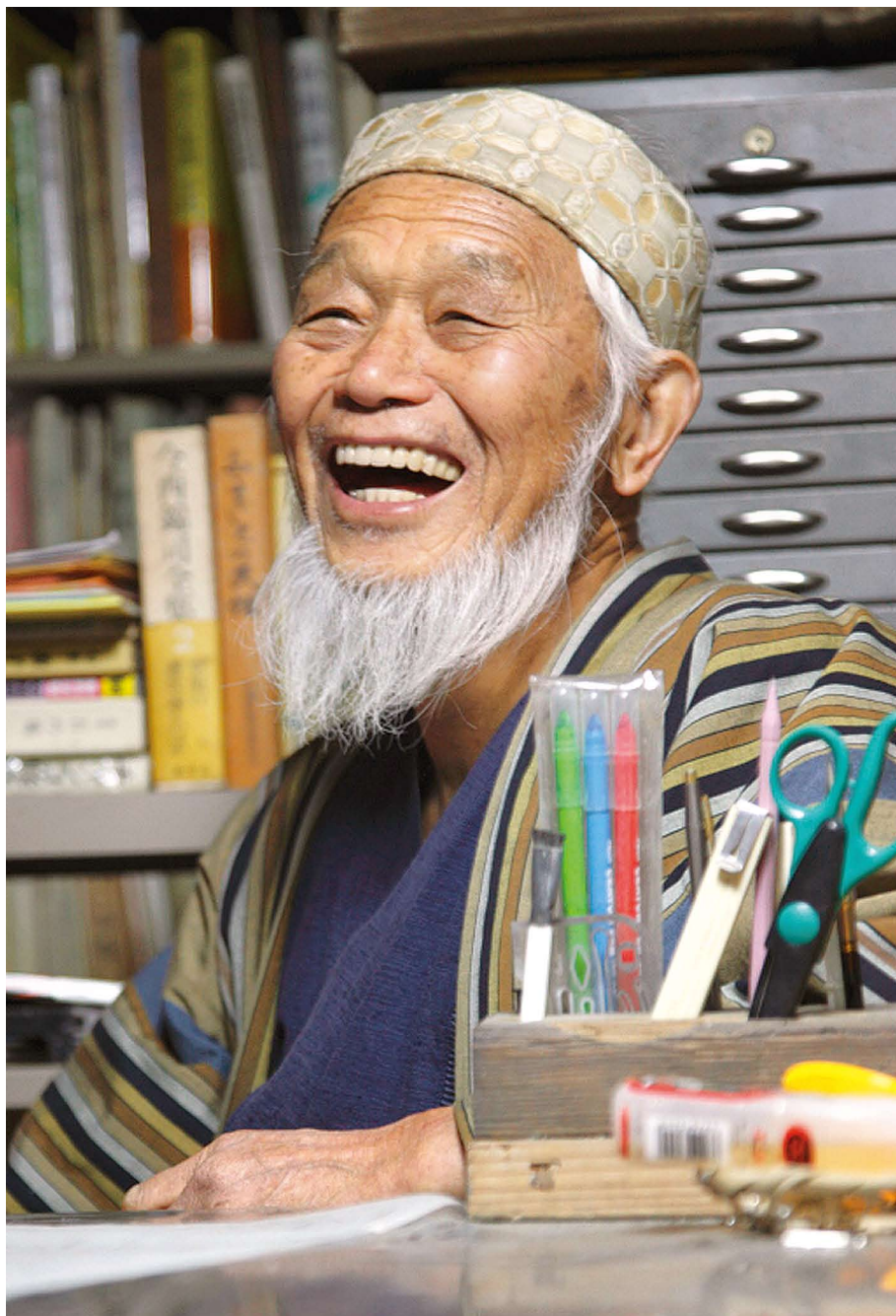


安田祐治先生「体育遊び研究の軌跡」





表紙写真 第13回世界体操祭にて

13th WORLD GYMNAESTRADA DORNBIN 2007

GRACEFUL GYMNASTS

第13回世界体操祭 ドーンビルン(オーストリア)2007大会
7月8日~12日 9:00~17:30 30会場、300団体が各20分毎日1回
演技する。夜は各国の夕べがあり、すぐれた演技が披露される。

楽しい
からこま

熱中し

白から青の

平成二十四年七月十五日

安田祐治



目次

致知 平成二十二年二月号 生涯現役 第四十八回	P2
京都教育大学同窓会だより 第七十号 平成二十三年四月十五日	P6
教育二十一世紀の会 会報 第八号 平成十八年十月三十日(金曜日)	P7
世界日報 持論時論 平成十六年四月二十三日(金曜日)	P8
京都新聞 提言 平成十六年三月九日(火曜日)	P11
京都新聞(夕刊) 高齢を考える 昭和六十三年二月十四日(日曜日)	P13
八瀬野外保育センター紀要 昭和五十七年九月十九日	P15
京都新聞(夕刊) こちら編集局市民相談課です 昭和五十一年五月七日(金曜日)	P19
京都新聞(夕刊) 昭和五十一年三月十日(水曜日)	P23
京都新聞 実態報告 昭和五十一年三月四日(木曜日)	P24
京都新聞 ホーム 昭和五十年一月四日(土曜日)	P26
安田祐治 履歴書	P29

生涯現役

第48回

90歳

体育遊び研究所主宰

安田祐治

遊具で子供を育む

豊かな社会生活が実現した半面、子供たちが外遊びする機会が激減している。この事態を憂慮し、九十歳のいまもなお独創的な遊具の開発を続ける安田祐治氏に、いまの教育の問題点と、遊具に懸ける思いについて伺った。

楽しくなければ
遊具ではない

——安田先生は、幼稚園や小学校などに設置する遊具の研究に尽力されているそうですね。

安田 私が子供の頃は野山を駆け回って遊んだものやけど、いまは自然がなくなっただけでしょう。自動

車も増えて安心して遊べる場所がない。これは子供たちの知力、体力、情操などを養う上で非常に問題です。だったら幼稚園、保育園や小学校で長時間遊ばせたらいいんやけど、園庭や校庭を見ると、遊具でない遊具がいっぱいある。

——遊具でない遊具。
安田 遊具というのはね、放って



おいても子供が楽しんで遊ぶものが遊具なんです。遊ぶ道具やからおもしろくなかったらいいかん。だけどちっとも楽しくありません。

例えば雲梯えんびがあるでしょう。あれはドイツから来たもので、もともと大人が腕の筋力を鍛錬するための用具なんです。あれでどないして遊ぶんです？ 幅も狭いから向こうから別の子が来たり、前に遅い子がいたら、降りんといかんしね。

これは私が設計した遊具の模型だけど、鎖のようなもので繋いで動く部分もある、曲線もある、いろんな要素を盛り込んでいるから、強い子も弱い子も障害のある子も、いろんな楽しみ方ができます。

——これなら楽しめそうですね。
安田 私はもともと小学校の教員で、遊具の商人ではないけれども、指導主事時代に学校の校長がしょっちゅう頼みにくるものだから、もう六百くらいこうした遊具の設計図を書いてきました。

——大変な数ですね。
安田 これまでの遊具は遊び方が決まってるでしょう。すると上手な子はできて、下手な子はできないままで、工夫して遊び方が上

達することもありません。

私の遊具やったら、上手な子は難しい所に行きよるし、下手な子は易しい所に行きますわ。必ず自分の能力に合った場所があるからどの子も遊べるんです。そして上達したらどんどん高度な所に移れるし、難しい所でやっている子も、使い方を工夫して違う遊び方ができる。そうやって一人ひとりが自分と相手の能力を知って、助け合いながら楽しむ中で、社会性も育つし、人格も養われていくんです。

運動を通じて 脳神経の発達を促す

安田 それから、私が遊具の設計で一番重視しているのは、体力増強ではないんです。脳神経を発達させることなんです。

——脳神経を発達させる。
安田 体が動くというのは脳の働きです。近年脳科学が発達して、運動させながら脳の活動を詳細に観察できる機械ができましたから、身体運動がいかに脳の発達に重要かが分かってきたわけ。

この頃幼稚園や保育園で、転んで顔を怪我けがする子が多いんです。七、八年前までの子は、顔を横に

向けたり、手をサッと出したりして防いだけど、最近はこちらと転んだだけで鼻の骨を折ったりする。——なぜでしょうか。

安田 倒れそうになった時にとっさに対応ができない。それは脳の問題です。すべての動作、活動は脳が筋肉に命令するんですから。

慣れた子は、あらかじめ先のことを見通して体が動く。名人ってのは皆そうなんです。野球のイチロー君は好きな所に打つでしょう。それは百何十キで来る球を、相手が投げる前にどこに来るか予見して動いているんです。

仕事で成功する人も皆そうです。いまみたいに経済が悪くなる前に予見して仕事をする。なつてから慌てる人は間に合わん。だから、運動はできんでも勉強したらいいという考え方はおかしい。

——運動で脳神経も発達すると。
安田 七、八年前までの幼児の一日に歩く距離は大体一万五千歩だったのが、現在は七千。半分になった。それだけが原因やないけど、外遊びが減って運動量が減ったことは、顔を怪我する子が増えたことと深く関係していると思います。私は理論の研究はしていないけ

ど、教員になってから七十年、子供とずっと接触してきたから分かるんです。子供は喜んだり、興味を持ってどんどん遊ぶ中で、重要な動きを覚えたり、予見する能力を身につけるんです。

難病を克服して 一人暮らし

——外で元気に遊ぶ子が少なくなったことは、大問題なのでですね。

安田 私は大正の生まれだからよく分かるけれども、日本人の生活が本当に文化的になったのは戦後ですよ。戦前はね、田舎は江戸時代とあまり変わらん生活をしようと。水道はないから井戸へ毎日汲みに行かないといけないし、電灯いうたら生活灯が一軒に一灯あるだけですね。もちろん暖房器具はないし、農民は冬だって素足ですよ。私はその生活をいまでも踏襲たうしゅうしているわけ。あははっ(笑)。

——それにしても、先生はこんな寒いのに随分薄着ですね。

安田 大体シャツ一枚か二枚。夏は裸です。教員をやっていた頃は、夏も冬もパンツ一丁で体育をやっていました。職員室に女の先生がおってもパンツになるから校長も

困って「君が裸になっても誰も文句を言えんな」言うて(笑)。暑い日は子供も皆パンツだけにして給食を食べよったです。人と違うことをしても認められて、それがもう癖になっていきます(笑)。

——いまは環境が整い過ぎて弱くなってきているのですね。

安田 弱ります。暑さや寒さに体で対応する前に、文化的なもので対応しますから。寒うなったら余計に着る。暖房をする。夏だったらずく冷房をする。だから体で対応する能力がまったくない。そりゃ弱いですよ。テレビもいかんと思ひます。天気予報で「きょうは寒くなりますから、暖かい格好でお出掛けください」とか、余計なことを言いよる(笑)。「きょうは寒いから、体を引き締めていきましよう」と言うたらいいんやけどね(笑)。

——お体が随分引き締まっていますね。

安田 特別なことは何もしておらんかったけど、五年前に家内が亡くなった後、突然病気になるから筋トレを始めたんです。

——ああ、ご病気をされて。
安田 重症筋無力症といって、国

が指定する難病の一つですわ。俳優の萬屋錦之介もそうやったね。

——奥様を亡くされたショックもあつたのでしょうね……。

安田 直接病氣と関係はないと思ひうけれどもね。死んだ者を生き返らすわけにもいかんしな。

とにかく食べられないのは辛かった。体中の力が入らなくなつて、飲めんし、食べられんし。ドロツとしたものをつくつてもろうて二時間以上かかってちよびつとずつ喉を通すものだから、これはかなわんと思つた。

「若い人は手術で治るけれども、前に七十五歳の人に手術したらうまくいかなかった」と言われたけど、神経内科の先生が、手術を勧めてくれたからお願ひしたんです。

——手術は大変だったでしょう。
安田 いや、大変なことはない。穴を七つ開けて内視鏡を入れて、肋骨と胸骨の間から胸腺という臓器を引っ張り出すだけやからね。

一週間後に抜糸したら、「病院ですることは何もないから、もう帰つてくれ」と言うんや。

入院前に三か月ほど、食事の世話になるために老人ホームに入っていたけど、世話が行き届き過ぎ

てかなわんのので、ホームには戻らずにすぐ家に帰つた。

——お一人で大丈夫でしたか。
安田 ミキサーを買つてきてドロドロしたものをこしらえて、二時間半ほどかけてちよつとずつ喉を通したわけや。何年かかるかなと思つておつたら、二週間目に水がグツと飲めた。水が飲めるんやたら食べられるかなと思つて、寿司を買つてきて食べたらうまいんや(笑)。それで二週間で普通食に変えたんです。病氣の時は、体もガリガリになつたけど、いまは腕もほら。

——見事な力こぶですね！ どうやって鍛えておられるのですか。
安田 朝は大体五時に目を覚まして、寝床で亜鈴を持ち上げるんです。仰向けのまま足を少し上げて腹筋も鍛えながら、両手に三キの亜鈴を持って、持ち上げる。前は百回やつたけど、いまは二百回。

——若い人でも相当きついですよ。
安田 それから腕立て伏せや首の運動をやつて、外の仕事です。草取りはせんならんわ、畑はせんならんわ、木の枝は切らんならんわ、掃除もせんならん。その後炊事をして食べたらあんだ、もう十時や。

——食事の準備もご自分で。
安田 自分でつくらなければ、誰がやるの(笑)。家内がやってくれたものも全部一人でやつてるから、仕事はいくらでもある。それから明日までにせんならん研究や図面書きをやるから、寝るのは夜中の一時、二時になる。

障害があるほど心を燃やして

——教育への志は早くからあつたのですか。
安田 先生になろうという強い意識があつたわけではないんだね。

昔は私のような田舎の子は、よっぽど裕福で勉強ができれば中学まで行こうとは考えなかつた。ただ師範学校は授業料が要らんし学費もくれる。先に入った兄から勧められて昭和九年に私も入つたけれども、そこは教員になるための学校だから、一所懸命勉強して出身の丹後の小学校の教員になつたんです。小学校だから、全部の教科を教えながら、特に体育を余分に研究したわけね。

——教師として心掛けたことは。
安田 こちらが一所懸命に子供と向き合えば、子供も一所懸命にや

ります。社会が変化しても、この本質は変わりません。若い頃は教え方は下手でも情熱はあるから、慕ってくれましたね。一番最初に教えた連中も、同級会をしたら必ず呼んでくれるし、米を送ってくれたりするんです。

——遊具の研究はいつ頃から。

安田 昔は貧乏やったから、施設のないところで子供をどう指導するか、随分苦労していました。教員になって三年目に、学校にほとんど運動する道具がなかったから、校長さんに「学校林の松の木を五、六本ください」と頼んだんです。校長は私の二年間の実績を知っているから「よし、やるわい」と言われてね。それで男の子たちを連れて学校林へ行き、松の木を十数本切って製材所で割ってもらって、平行棒やら滑り台やらいっぱいつくった。それが最初です。

京都は明治の学制発布の前に六

十四の学校を創^つって町で運営していた名残で、自分たちの学校という意識が強いから寄付が多いんです。十四年いた指導主事時代に校長が「この寄付金で、遊び場にくい遊具ができないか」と相談にくるから、子供が喜び、工夫して、熱中できるものを考えたんです。つくったら必ず子供の遊び方を見に行つて、次に頼まれた時に改良する。だから世の中のない遊具がどんどんできた。私は十九年間学級担任の教員を務めた後、教育委員会や大学で指導をしながら遊具の研究を続けました。いまは全国千以上の幼稚園、保育園や小学校に導入されています。

——評判を呼んでいるのですね。

安田 遊具を使って体をよく動かすには、おもしろくなかったらいかん。子供がおもしろがる遊具はある程度危険なものです。

——危険なほうがおもしろい。

安田 二輪車は転ぶから三輪車より危険だけど、乗りこなせたら達成感があつておもしろいでしょう。そうやって能力が上がるんです。ところがそこが理解されにくくて、せっかく導入しても、たまに子供が落ちたりすると、撤去されることもあるんです。

——ただ、クラスに掛け算九九ができない子が二、三人いても、九九を教えるのをやめはせんでしょう。できない子に頑張れと言うでしょう。遊具の場合も同じだと思ふけど、他の子が喜んで遊んでいけるのに、学校が親を恐れて撤去させる。最近の親の世代も外遊びの経験が少ないから、理解されないこともあるんです。

——残念なことです。

安田 一人の子が生まれる前、母親のお腹の中で単細胞が分裂して途中で魚の格好になったり、イモリの格好になったり、猿の格好になったりして人間として生まれてくる。十か月の間に三十八億年の進化の過程を辿^たります。

私はね、これを生まれてからの動作活動の発達でも同じように繰り返していると思うんです。赤ん坊の時は自分で移動できないから、

芋虫みたいなものやね。ハイハイする時は両生類から爬虫類。高バ^いイで哺乳類になり、樹上生活に入り四足が指で握れる手足になったんです。それが猿です。さらに地上に降りて原野に暮らし始め、直立二足歩行が完成して原人になったわけです。原野で遊び回れる(原人遊び)までの十年間の子供の発達、発育は、四足動物から人間への高度な進化の過程を示しているといえるでしょう。

その間に脳もどんどん発達して、七、八歳で成人に近い大きさになります。そこで大事なのが運動なんです。それを危ないからというて保護ばかりしていたら、子供の成長の機会を奪うことになるんです。よく遊ぶ子供は遊具からほとんど落ちたりしません。怪我の件数が少なくなるのは統計が証明してくれています。

——健全な成長のためにも、よい遊具を普及していくのですね。

安田 このままでは、体力がなくなりますが、親の介護もできない大人ばかりになりますから、なんとか子供の健全な成長を凶^つついでいかなければいけません。障害があるほど、私も余計に燃えなければあかんわな。

保護ばかりしていたら、
子供の成長機会を奪つてしまふ。

京都教育大学 同窓会だより

第七十号

平成二十三年四月十五日

特別寄稿

私の遊びの原点

京都師範学校 昭和十四年卒 安田祐治

子供の頃の生活

幼い頃は兄や親戚の姉さんの背中にくっつけられて年長の者の遊びの範囲内にいた。或る程度走れる様になると、村の中・海辺や川原を仲間と走り廻っていた。雨の日は家の中だが今の様な文明具はなく伝承的な遊びである。

何もかも自分達で考え、工夫し、作ったりしていたし、打ち身すり傷などはしょつ中である。薄(すすき)の葉で皮膚を切り軽い出血もした。出血はすぐ止まり血の固まった直線が残っている。その時に薬を塗りに家へ帰る子はいない。少し強い打撲で「うーん」と参っていても、少し休むと治ってしまう。こんなことは、日常茶飯事で何ら特別の事ではない子供たちである。

少年時代の学校と生活

私は大正十五年(一九二六)四月、村の小学校に入

学した。全校児童二百名弱で、尋常科一年二年計約五十名、三年四年計約五十名、高等科計約三十名の複式学級の四級編成である。教員は校長を含めて四名で校長も学級を担任し毎日授業をしていた。二年五十名の複式学級の授業は今の人達には想像出来ないであろうが私には思い出深いものがある。

当時の全国の田舎で尋常科卒業後中学校や高等女学校に進学するのは、村長になる家柄か、教員等の知識層の子くらいで、大部分の子は、高等科(二年)卒業後実業についた。従って学習よりも少年団活動・自由遊び家業手伝いなど実社会で生きていく習慣が身につけて成長していったのである。

校長時代の経験

子供が絶えず保健室に来ている。見ると腕や脚に擦り傷をして薬という訳だ。養護教諭に「傷もなく出血もないのに何故薬を塗るのか」と問うと、「前の校長先生がどんな小さい傷でも丁寧に処置せよと言われましたので」と。「傷も出血もしないのに薬は不要。小出血しているなら、先ず本人に『水道で洗って来い』と言いつ、それからその儘でよいか処置が必要か決めるのが教育だ」と言いつて過剰手当てを止めさせた。

京教大講師時代の実技時間の事故?

女子学生が衝突して倒れた。すぐに半身を起こし本人が「救急車を呼んでください」と叫ぶ。それ程の傷害とは思わなかったが一人付き添いをつけて行かせ授業を続けた。二十分程で帰って来た。「お医者さ

んが『何も無い。帰ってよろしい』と言われました」という事。同様事例は教員研修の時にも二例あった。子供たちはこの様な先生に指導してもらっているのだ。

校長先生喧嘩です!

遊具・校具の故障・喧嘩その他諸事の報告・陳情・懇請など多い。「よいっしやあ」と校長室を出てゆく。校長を入れた大きな輪が出来、格闘中の二人を囲む。二人は力闘・奮闘・全身で、技術を尽くす。十分、二十分、三十分、放課後であるため取り囲む輪は安心して応援している。四十分近くなって二人の動きが緩くなりやがて静止した。二人の顔に悔しさ・無念さは微塵もない。晴れやかである。大きな人の輪もまんぞく顔で散った。校長室に担任教諭が喧嘩見物の抗議に来た。「強者が弱者とか多数で一人をではない。教師は子供の真実の姿を観なあかね」と答えた。

子供生活今昔

今の子供は高度の文明社会に暮している。然し体を動かして活動し、自発・自主・自律に根ざした楽しい遊びに熱中していく実体験が乏しい。之を戻さねばと私は微力努力中。

.....

安田祐治先生は京都市教育委員会の指導主事、小学校校長など、長年教育現場の最前線で子供たちと接する中から「子供と遊び」の関係を追及、五十年以上前から、当時の幼稚園・保育園の幼児の体育遊び・運動遊びを研究しはじめた世界でも数少ない専門家です。

教育二十世紀の会 会報 第八号

平成十八年十月三十日（金曜日）

脳は楽しい実体験

まともな人間は、熱中する身体運動で培われたまともな脳で行動する

体育あそび研究所主宰 安田祐治

幼少年期を襲う事件、誰でもよい殺しなかった。我が子を殺す。親を殺す。そんな事件が毎日報ぜられる。九十年近い私の人生で近年迄無かった事だ。

要因は単純ではないが中でも大きいのは幼少年期の生活内容の貧困、換言すれば「遊ぶ事の減少」だと思ふ。遊びは「楽しい事に熱中する。」人類の本能である。自分のやり方で工夫し乍ら動作・行動して、やり遂げた満足感を得るものである。自らの発意で目標に向かい苦勞と努力を積み重ねていく生涯の生き方を、夢中になって行ふ楽しい活動の中で自然に身につける重要な生活である。又大勢と一緒に場で共に力を合せて喜ぶ心や習慣も育つのである。然し近年の子供たちは此の大切さを無視して育てられている。

安全安心保護第一、乳児は厚着で手も足も全く動かせない。身体の各部はすべて脳の働きと連動しているから結果的に脳の発達は阻害されている。手足

や頭を自由に動かし胴体を屈げ反らして寝返りやハイハイをする。これを遅らせてはならない。危険物に近づけない処置は必要だが、ハイハイして目的物に行き着く事は発育に欠かせない行動体験である。障子を指で付き破れると大喜び、新聞紙ちぎりも楽しい。これ等は飽きる迄やらせたい。

高い所を握る。階段登りなどもハイハイ時に興味を示すが大人は阻止する。然し此の種の興味は此の年齢で適正な心情である。大人は幼児の背後で見守ればよい。片手づつ片足づつ順に上げ、腕と膝に力を入れれば一段登る。これを繰り返せば階段登りをすぐに覚える。降りも階段が見えたら後ろ向きにならせ、片足づつ片手づつ下の段に降りし胴体をわずらす事を教えたなら喜んでやり出す。歩く前の幼児が階段昇降に熱中する。本棚の本落とし、鉛筆クレヨンでのグチャグチャ描きなど皆脳の発育の重要栄養素である。以後の幼保での運動遊び、小学校時代の体育運動や冒険的な遊びなども脳の多面的な発育にとつての必要行動である。

人の大脳細胞数は百四十億で生涯増えることはない。一歳で五〇%三歳で七〇%にも達する程急速に成長し、十歳ではほぼ百%近く迄発育するのである。今は幼児や少年の脳と行動の実態を低く視過ぎてい

る。家や園・学校で軽微な危険すらすべて除去しようとしている。小さな事故や怪我を経験してこそ、危険に対する知識判断や身体への対応技能も高まり、事後処置も出来るようになる。安全能力が育つのである。今は行き届く保育教育が大きく叫ばれる。行き届くとは本人にさせないで「してあげる」事だ。子供

たちに必要な実体験を取りあげて脳の発達を妨げている事が多い。

遊びと勉強は矛盾しないし、楽しさは「楽(ラク)」をする事ではない。本当の遊びは困難に対して挑戦するものである。楽しいからこそ苦勞もいとわず熱中するのであり、努力が大きい程満足感も得る自信も大きいのである。

与えられた内容を記憶するとか行っただけ、あるいはおとなしく従順で争わないだけでは、正しく正しい自主的で協力的な人間形成は望めない。夢中になって活動する生活の中で育った「まともな脳」を持つことのみ、「まともな人間」は育つのである。

平成十六年四月二十三日（金曜日）

樹上遊びの効用を説く

「体育遊び研究所」主宰 安田祐治氏に聞く

最近の子供たちは学力だけでなく、体力面での低
下も懸念される。京都で「体育遊び研究所」を主宰す
る安田祐治氏は長年、野外遊びが子供の健全な心身
の発育に欠かせないとして、そのための遊具も開発
するなど、指導普及に取り組んでいる。野性の芽を
摘む安全優先主義の弊害や、危険認知の力と処置能
力を育成する必要性などについて聞いた。

（聞き手・池田年男）

高所運動は脳の発育促す

誤った安全主義目立つ

自律性、社会性の欠如生む

●長年、教育現場を歩んできて、青少年の現状を
どう見ますか。

わが国の青少年は二十世紀の百年間で平均身長が
約十三センチも高くなりました。中高校生ともなる
と、もうほとんどが大人と変わらないような体格の
持ち主ばかりです。しかし、それは見掛けであって、

肝心の基礎体力や運動能力となると、これらは近年、
著しく低下しています。

しかも、学力も全体的に低下していますし、さら
に自律性・社会性が欠如し、心の未熟さが目につく。
中高生の暴力や凶悪犯罪が増加する一方ですが、調
べてみると、そういう問題を起す子は「テレビっ
子」というケースが多いのです。テレビを長時間見
たり、テレビゲームにのめり込んだりする子のこと
ですが、こういう生活習慣を見直さないといけない。
最近の脳についての研究結果からもそう強調してい
ます。テレビゲームやテレビの視聴を長時間してい
ると、その間の脳波は痴呆(ちほう)状態の脳波と同
じというデータが出ています。携帯電話も同様
の弊害があります。

こういう状況を改善しないと、前後をわきまえる
ことができません。人のことを考えない、仲間意識がない、
感情のままに動くという人間がますます増えるとい
うことになります。不況とか政治不信とか、い
ろいろ課題を抱えている日本ですが、考えていくと
基本的には次代を担う子供たちの教育に行き着く。
極めて深刻な現状で、日本の国や民族の将来に多大
な不安が生じています。

●改めて、学校教育以前の、家庭環境や親による
躰(しつけ)の重要性が痛感されますね。

私はなりよりもこれらの大きな原因として、幼少
年時の遊びの不足と偏向があると思います。つまり、
文明の利器に囲まれ、恵まれた生活の中で、「室内遊
び・一人遊び」に没頭し、「外遊び・仲間遊び」をし
なくなりました。子供の時には、大勢の仲間と群れて遊び、
もまれることで自分と他者の違いなどを体で習得し、

他者の痛みを思いやる感性やいろんな情操、能力、
社会性を身につけていくのです。家の中に閉じこ
もって一人で過ごすということは、脳の発達にもよ
くない。人間は一人では生きていけない存在です。
幼年期から社会への適応能力を総合的につけておく
ためには、家の外で仲間と元気に遊ぶことが最も大
切なことなのです。

ところが、家庭でも学校でも目立つのは、誤った
「安全第一主義」や「行き届き過ぎた子育て・教育」で
す。危険なことや物から子供を遠ざけて、安全んば
かりに気を使っている。こういう風潮は、子供の身
体や精神のまともな発育をはなはだしく阻害してい
ると考えざるを得ません。

●「樹上遊びで脳が育つ」と提言するなど、体育遊
び研究所を主宰しているのは、そのためですね。

はい、本来、子供たちは原っぱや森や川など自然
の中で伸び伸びと走り回り、木登りなどして遊ぶの
が一番好きなのです。今は都会ではとてもそんな
自然あふれる環境はないし、木登りしたくても大人
が制止したりしてできない。そこで、その代わりに
なる遊具として考案されたのが、鉄棒、ジャングル
ジム、ブランコ、懸垂シーソー、懸垂回旋塔、平行棒、
登降棒、つり輪であり、それらの面白い部分を全体
的に集約したのが総合遊具です。京都市の小学校に
ある総合遊具は私が考案、設計しました。

地上よりも高い所で遊び、運動するわけですから、
おのずと恐怖心を克服し、技が多様となり、複雑巧
妙な変化など興味深く、満足感のある遊びができま
す。従って、脳の高度な発育が望めますし、幼少年
期には不可欠な遊びだと信じています。

高所運動は脳の发育促す

樹上遊びの効用を説く

「体育遊び研究所」主宰 安田祐治氏に聞く

「樹上遊び」は、子どもが木の上で遊ぶことを指す。木の上で遊ぶことで、子どもは自然の環境の中で、様々な運動を体験し、脳の発達を促す。また、木の上で遊ぶことで、子どもは自然の環境の中で、様々な運動を体験し、脳の発達を促す。

持論 時論

現代社会は、子どもが自然の中で遊ぶ機会が減少している。これは、子どもの脳の発達に悪影響を及ぼす。我々は、子どもが自然の中で遊ぶ機会を増やすべきである。自然の中で遊ぶことで、子どもは様々な運動を体験し、脳の発達を促す。また、自然の中で遊ぶことで、子どもは自然の環境の中で、様々な運動を体験し、脳の発達を促す。

誤った安全主義目立つ

自律性、社会性の欠如生む



安田祐治氏。東京府立第一高等学校卒業。現在は、東京都立大学で教職員の養成に携わっている。

現代社会は、子どもが自然の中で遊ぶ機会が減少している。これは、子どもの脳の発達に悪影響を及ぼす。我々は、子どもが自然の中で遊ぶ機会を増やすべきである。自然の中で遊ぶことで、子どもは様々な運動を体験し、脳の発達を促す。また、自然の中で遊ぶことで、子どもは自然の環境の中で、様々な運動を体験し、脳の発達を促す。

危険認知・処置能力が必要

子供の野性の芽を摘むな

現代社会は、子どもが自然の中で遊ぶ機会が減少している。これは、子どもの脳の発達に悪影響を及ぼす。我々は、子どもが自然の中で遊ぶ機会を増やすべきである。自然の中で遊ぶことで、子どもは様々な運動を体験し、脳の発達を促す。また、自然の中で遊ぶことで、子どもは自然の環境の中で、様々な運動を体験し、脳の発達を促す。

やすだ・ゆうじ 大正8年(1919年)5月、京都府丹波郡(現・京丹後市)生まれ。同府師範学校(現・京都教育大)卒業後、小学校教員、京都市教育委員会指導主事、府内3校の小学校校長を経て昭和54年(1979年)退職。長年、教育・体育の学習指導法の研究に努め、多くの指導書、研究ルーツを著述。子供の体力向上と知育意欲がな人間形成を目指す「外あそび体育遊具協会」を設立し、その研究開発・指導・普及に努めている。現在、同協会顧問。「体育遊び研究所」主宰。

人の動作や活動は脳の指令によるものですし、知覚の活動も脳の働きに負うところが大きい。憂慮すべき最近の体力低下も凶悪犯罪なども、脳の発達未熟と偏った発育の結果と見ていいでしょう。その脳の成長というものは、三歳で約七割、十歳でほとんど完成近くできてしまう。発育を促す刺激としては、体を楽しく動かすことで得られる実体験が最も効果的です。幼い時から毎日が楽しい活動的なものであることが脳の正常な発達には欠かせないということなのです。

危険認知・処置能力が必要 子供の野性の芽を摘むな

●一平地よりも、樹上での遊びがいいというのは、どんな根拠がありますか。

人は直立二足歩行ですが、他の脊椎(せきつい)動物はほとんどが横体四足歩行です。横体四足の場合、頭は胴体の前に突き出しているため、脳をこれ以上に重く発達させることは不可能となります。直立すれば、頭は真上に位置するので数倍の重さまで発達が可能ですが、しかも、前肢は腕・手・指となつて自由自在に複雑精緻(せいち)な動作ができるようになった。そして、長い年月の間に脳を発達させながら直立二足歩行へと進化してきたと考えられます。危険がいっぱいの地上から、より安全で食料も豊富な樹上へ逃れた小さな哺乳(ほにゅう)動物においては、最初は爪(つめ)で体を支え、移動させていたのが、次第に指で握るようになって、それが直立を可能にし脳を発達させた。その後、樹上から地上へ

降りて、直立二足歩行を完成させたというプロセスになると思います。ですから、樹上での体験というのは身体能力をフルに動員する原点ということになります。

●木登りも危ないからとやめさせるのは明らかに行き過ぎですね。

油断したり不適切な動作をしたりすれば高い場所から転落するのは当たり前で、遊具自体に責任はありません。落ちないように気をつければ済むことであり、そういう能力を身につけることこそが大切なのです。それを、「危ないからブランコは外した」とか「よく落ちるので総合遊具を廃棄した」とか言っただけでやめた幼稚園や私立の小学校があります。

しかし、よく考えてほしい。例えば平成十三年の統計ですが、九歳までの自動車事故による死亡は年間約三百人あるのに、学校・園内の遊具事故による死亡はほとんどありません。海水浴や水遊びでの事故のほうがずっと多い。「危ないから禁止」と言うのだったら、自動車に乗せない、海にも水辺にも行かせないということになるが、それはしないわけでしょう。

遊具から落ちてケガをするというのはよほどのことであって、大部分の子は喜んで熱中し、体力と脳の働きを存分に発揮しているんな局面に適應する基礎的なものを身につけているのです。平地での遊びと違って、高い所では広範な注意力や、判断力が求められます。プラス面のほうがずっと多い。

学校関係者は事故の防止に汲々(きゅうきゅう)とするあまり、大切なことを切り捨てての傾向にある。子供を教育するとは、さまざまな能力を獲得させることであるはず。危険を遠ざけるのが安全ではありません。危険を認知し適切に対応する判断と処置能力を身につけることこそが安全なのです。第一、絶対に安全な遊具なんかでは子供は遊ばないものです。そりゃ、面白くもなんともないでしょう。

かつて私が作った遊具についてある保護者から「これは危険か」と尋ねられたことがあり、その時に即座に「危険だ」と答えたので、その人は驚いた顔をしていました。私から言わせれば、子供は生傷が絶えないほど外で遊ぶのがいいのです。小さいケガを経験することで、大きなケガを防止できる能力が

身につく。

何から何まで大人が行き届いた配慮をし過ぎて、かえって子供の野性の芽を摘み、たくましい心と体をつくり上げていく大切な時期に安全ばかりに重きを置いて、ひ弱な人間にしまっていると懸念しています。国の危機管理が叫ばれています。個人の危機管理は子供のうちから遊びを通してすべきことと断言していいでしょう。

●今の学校教育のあり方にも疑問を感じますか。

成績がいい子というのは、要するに記憶力のいい子ということ。それ以外の創造力や統率力、企画力、決断力などは試験されない。だが、実際は社会に出て物を言うのは、それらの能力なのです。商船学校では、帆船を使って訓練しますが、帆を張ったりマストに登ったり甲板を掃除したり、ああいうことは、実際に船乗りになれば今の船はほとんどコンピュータですから必要ないですよ。でも、あれをやらないと海での生活ができない。そういう教育訓練が大切です。

オピニオン解説

樹上遊びで脳が育つ

体育遊び研究所主宰 安田祐治氏

わが国は二十世紀百年で身長が約十三センチも高くなった。しかし青少年の基礎体力や運動能力は近年著しく低下し、国家や民族の将来に多大の不安が生じている。しかも学力の低下も大きく、さらに心の未熟、自律性・社会性の欠如、暴力・凶悪犯罪の増加などは極めて深刻な問題である。

危険認知の力と処置能力を育成

■体験が発育刺激

これらの大きな原因の一つとして幼少年時の遊びの不足と偏向があると思う。恵まれた生活の中で「室内遊び一人遊び」に没頭し、「外遊び仲間遊び」をしなくなる。「誤った安全第一」や「行き届き過ぎた子育て・教育」が身体や精神のまともな発育をはなはだしく阻害していると思わざるをえない。

人の動作・活動は全て脳の指令によるし、知情意の活動も全て脳の動きそのものである。憂慮すべき

体育遊び研究所主宰 安田 祐治氏



やすだ・ゆうじ 1919年、京都府丹後町生まれ。京都府師範学校(現京都教育大)卒業後、小学校教員、京都市教委指導主事、府内三校の小学校校長を経て79年退職。長年、教育・体育の学習指導法の研究に努め、多くの指導者、研究グループを育成する。また体育遊びと適切な遊具を開発し、指導普及に努力している。84歳。

樹上遊びで脳が育つ

わが国は二十世紀百年で身長が約十三センチも高くなった。しかし青少年の基礎体力や運動能力は近年著しく低下し、国家や民族の将来に多大の不安が生じている。しかも学力の低下も大きく、さらに心の未熟、自律性・社会性の欠如、暴力・凶悪犯罪の増加などは極めて深刻な問題である。

ることが脳の正常な発達には欠かせないといえよう。

「危険認知」とは、危険を察知し、適切な行動をとる能力のことである。危険を察知する能力は、主に視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚などの五感を通じて得られる。また、過去の経験や学習から得られる情報も、危険認知に大きく影響している。

■体験が発育刺激

これらの大きな原因の一つとして幼少年時の遊びの不足と偏向があると思う。恵まれた生活の中で「室内遊び一人遊び」に没頭し、「外遊び仲間遊び」をしなくなる。「誤った安全第一」や「行き届き過ぎた子育て・教育」が身体や精神のまともな発育をはなはだしく阻害していると思わざるをえない。

提言

危険認知の力と処置能力を育成

人は直立二足歩行であり、他の脊椎動物はほとんど横体四足

歩行である。横体四足の場合、頭は胴体の前に突き出しているため脳をそれ以上発達(重く)させることは不可能である。直立すれば頭は真上に位置するため数倍の重さまで発達が可能である。しかも前肢は腕・手・指となつて自由自在複雑精緻な動作が可能になった。そして長い年月の間に脳を発達させながら直立二足歩行へと進化してきた。

この横体四足が直立へと進化していったのは、数千年の樹上の生活がもたらしたものである。危険な地上からより安全で食料豊富な樹上へ逃れた小さな哺乳動物が爪による支持・移動から指で握るようになり、移動から指で握るようになり、脳を発達させたと思われる。その後樹上から地上へ降りて直立二足歩行を完成させるのである。

多くの学校園に設置されている遊具には公園用やトレーニング用が意外と多く、それは遊びの技や内容が幼稚・単純で子どもたちの興味や能力に応じて挑戦し熱中する構造になっていないものが多い。私たちが子どもの体力向上と知情意豊かな人間形成を目指す外遊び・体育遊具協会を設立し、その研究開発・指導・普及に努めているのである。

オピニオン解説

■多様な遊具を生む

樹上生活の遊びは、鉄棒・ジャンケルジム・ブランコ・懸垂シーソー・懸垂回旋塔・平行棒・投降棒・つり輪・総合遊具などの遊具を生んだ。地上より高い所で運動であるから、恐怖心の克服・技の多様さ・複雑巧妙な変化など興味深く満足感絶大の遊びである。従って脳も高度な発育が望めるのであり、幼少年期の重要な遊びと信じている。しかし油断をしたり、不適当な遊びをしようと転落する怖れもあるため、「危ないからブランコは外した」「よ、落ちるので総合遊具を廃棄した」などの園や私立小学校もある。しかし年間約三百人あるのに、学校・園内の遊具事故死にはほとんどないのである。

落ちる時は正常ではな、大部分の子は喜びに満ちた熱中し、体力と脳を存分に発育させているのである。

危険を避けるのが安全ではない。危険を認知し適切に対応することが安全なのである。また子どもたちは絶対安全な遊具では遊ばないのである。

多くの学校園に設置されている遊具には公園用やトレーニング用が意外と多く、それは遊びの技や内容が幼稚・単純で子どもたちの興味や能力に応じて挑戦し熱中する構造になっていないものが多い。私たちが子どもの体力向上と知情意豊かな人間形成を目指す外遊び・体育遊具協会を設立し、その研究開発・指導・普及に努めているのである。

体力低下も凶悪犯罪なども全て脳の発育未熟と偏った発育の結果といえよう。脳の成長は三歳で約七割十歳でほとんど完成近くできてしまうし、発育刺激としては楽しい身体活動による実体験が最も効果的であるとされている。幼い時から毎日が楽しい活動的なものであることが脳の正常な発達には欠かせないといえよう。

人は直立二足歩行であり、他の脊椎動物はほとんど横体四足歩行である。横体四足の場合、頭は胴体の前に突き出しているため脳をこれ以上発達(重く)させることは不可能である。直立すれば頭は真上に位置するため数倍の重さまで発達可能である。しかも前肢は腕・手・指となつて自由自在複雑精緻な動作が可能になった。そして長い年月の間に脳を発達させながら直立二足歩行へと進化してきた。

この横体四足が直立へと進化していったのは、数千万年の樹上の生活もたらしたものである。危険

な地上からより安全で食料豊富な樹上へ逃れた小さな哺乳動物が爪による支持・移動から指で握るよう進化し、それが直立を可能にし脳を発達させたと思われる。その後樹上から地上へ降りて直立二足歩行を完成させるのである。

■多様な遊具生む

樹上生活の遊びは、鉄棒・ジャングルジム・ブランコ・懸垂シーソー・懸垂回転塔・平行棒・投降棒・つり輪、総合遊具などの遊具を生んだ。地上より高い所での運動であるから、恐怖心の克服・技の多様さ・複雑巧妙な変化など興味深く満足感絶大の遊びである。従って脳も高度な発育が望めるのであり、幼少年期の重要な遊びと信じている。しかし油断をしたり、不適當な遊びをすると転落する怖れもあるため、「危ないからブランコは外した」「よく落ちるので総合遊具を廃棄した」などの園や私立小学校もある。しかし九歳までの自動車事故の死亡は年間約

三百人もあるのに、学校・園内の遊具事故死亡はほとんどないのである。

落ちる時は正常ではなく、大部分の子は喜びに満ち熱中し、体力と脳を存分に発育させているのである。

危険を遠ざけるのが安全ではない。危険を認知し適切に対応する判断と処置能力を身につけることが安全なのである。また子供たちは絶対安全な遊具では遊ばないのである。

多くの学校園に設置されている遊具には公園用やトレーニング用が案外多く、それらは遊びの技や内容が幼稚・単純で子供たちの興味や能力に応じて挑戦し熱中する構造になっていないものが多い。私たちは子供の体力向上と知情意豊かな人間形成を目指し外あそび体育遊具協会を設立しその研究開発・指導・普及に努めているのである。

安田さんと『子供の遊び』との出会いは三十年も前にさかのぼる。昭和三十三年四月に小学校教諭から京都市教育委員会の指導主事となった。そのころの専門は小中学校の体育指導。と同時に幼児体育の指導も兼ねるようになった。

「幼稚園には体育という教科はなくて、特に体育指導主事というのはいなかったんです。そのころの幼稚園は安全と保健にばかり力を入れていたんです。これは消極的でダメですね。しかし次第に体育遊びの必要性が叫ばれるようになって、私におはちが回ってきたというわけです」

四十七年までの十四年間指導主事を務めたあと、小学校長として現場に出た。

「現場に戻ってみると、先生方は子供たちを活発に遊ばせる経験が乏しく、大人のスポーツをそのままやらせたり、安全第一で退屈な遊びをさせたりで、子供自身が自分で工夫して、全身全霊を投入して遊ぶ機会が少ないということを実感させられました」

そこでまず取り組んだのは「危険だから」と長い間使われなかったブランコ、シーソー、雲梯(うんてい)など、禁じられた遊びの解禁だった。と同時に、これまでの遊具に改良を加えたりした。

「遊びというのは、それ自身が目的で、そのこと自

体を楽しむということですね。そして、そうした中で知らず知らずのうちに、共通のルールを見つけて、仲間づくりをし、助け合い、社会性を身につけて、心身ともに成長して行くのです。体の動きの基礎は十歳前後までにつくられますので、幼児期から少年期にかけての運動や遊びは重要な意味を持っているんです」

ラジオ体操に象徴されるように、日本の体操は画一的で、強制的、命令的というのが一般的。これらは前かがみの作業が多かった農民のためのスウェーデン体操を取り入れたもので、今は時代遅れ。その本家本元でさえ、すでに『一二三』の号令を捨てて、音楽をバックに自然なゲーム的な楽しさを盛り込むようになってきているのに、日本ではまだまだ古いイメージから抜け出せないでいると嘆く。

「最近、スポーツ選手を幼稚園に派遣してもらうといった例が多くなっていますが、それは考えものです。というのは、一流プレーヤーは、できる子供の力を伸ばしてやることはできても、普通の子供にやる気を起こさせるといいう指導力については疑問ですね。小さいうちから単純な技術を強制したり、高度の技術を仕込んだりしても、子供は大成しません。全身運動こそが大切なんです」

師範・教師時代は器械体操の選手として活躍したが、「一流プレーヤーでない方が指導法がうまい」という哲学は、指導主事時代に培われたらしい。

五十四年三月、小学校長を最後に定年退職。それ以前の五十年から年一回『母と子の体操教室』、五十六年十二月からは毎週月曜の朝、『体操教室』を開いている。大人にも体操の楽しさを知ってもらおうというのがねらいだ。

日曜はスポーツ行事に出動。週一日は短大で幼児体育の理論を講義。また中学校の先生方とのヨロップ体操の勉強会や、幼稚園・保育所の研修会と駆け回っているが、週一回は早朝水泳を欠かさない。

「子供たちは、遊び場がない、自然がない、塾通いで時間がないといった状況で、全力を投入して遊ぶといった環境を失っています。昔は学校で勉強して、家で遊んだんですが、今は学校なり、園なりの生活の中で、遊びを補ってやらなければならないのです。そのためには、いい指導者が必要です。いい発育を促進するためには、遊びは絶対必要なのです」

教職を離れてから、伸ばしたひげもすっかり白くなった。子供たちからは「サンタさん」と親しまれているが、自分では「鍾馗(しょうき)さん」を自負しているこの人。子供たちの強い味方である。

八瀬野外保育センター紀要

昭和五十七年九月十九日

子供と遊び

幼児の体育あそび研究会初代代表

安田祐治

序

近時日本人の体力低下が叫ばれて相当な期間がたった。市民のスポーツ塾も非常に高まりを見せており、体振活動、ママさんバレー、少年野球を始めとする各種少年スポーツも花盛りである。府・市民体育館は言うまでもなく、温水プールや婦人体操教室も数多く開かれている。嘗て手本と仰いだ西ドイツの黄金計画に追いつくかとも思わしめる。

幼児をめぐる世界も例外ではない。幼稚園や、保育所等で、健康づくり、体力づくり、スポーツ指導などが重視され始め、中には大学等の体育研究室と結んだり、専門のスポーツ指導員をおいたりといった所もかなりあるようである。然しこれらの健康づくり・体力づくり・スポーツ指導は、幼児の成長に対して何を果たしているのであらうか。これらの指導は成程目覚ましい練習効果を挙げているであろう。だがそれがすぐ幼児の体力向上だと言えるかどうか。幼児期に必要で好ましい発育発達の刺激になっ

ると言えるであらうか。或は子供の性格の陶冶に良い効果を十分にもたらして言えるであらうか。更に総合的に人間形成にとって寄与しているであらうかなどと考えると、必ずしも肯定的な結論が出せないように思えて仕方がないのである。

一、幼児の発育は遊びによって促進される

幼児は周囲のあらゆる物に興味を示し、それに積極的に触れようとすし、そのことを試みようとする。うまくいこうがいこまいが、上手だろうが下手であるうが興味のある事に関してはとことん係わっている。失敗しても繰り返し挑戦していき無我夢中になつて取り組んでいく。そしてそれがすんだ時、やり終えた時、成就した時心からの笑みを浮かべている。或事に厭きると次の事へ立ち向かっていく。次から次へと飽く事を知らない。

然し好まない事や興味の湧かない事を押しつけてもそれほど熱中しないし、たとえ熱心にやっている様でも、それを止めると束縛から解放されたように逃げて行ってしまふ。

興味と熱中の渦の中で満足感を得、この満足感が次の興味と意欲を誘い熱中、工夫へと導かれ、活発で充実した生活を営むことになるのである。このような生活活動が、幼児の身体発育ならびに感情意の陶冶をも順調に進めていくものなのである。子供にとって大切な事は、限りなく興味を起し、全身全霊を打ち込んで活動し(遊び)、その遊びの喜びと満足感を体得していく事である。

大人の立場に立てば、もっと具体的にこれもあれもという「教え込まねばならない事」が実に多いことだろう。然しそれが知識として、技能として、情感として子供の身につくためには、前述した「熱中した活動」を通すことが大切で、興味も示さず、いやいや強制されてやったものでは血にも肉にもならないのである。

幼児の発育は脳神経系の発達が主軸になっていくことに特徴がある。この脳細胞の発達は興味に誘発された活発な身体活動により刺激促進され、活動の満足感によって定着すると言われている。幼児が示す興味を「危い。」と言って次から次へと奪い、子供が試みる活動を「まどろっこしい。」「そんな下手な。」と言って代ってしてやる。「汚い。」と言って「禁止」役に立たない事。」と言って外の事を強制する。「あんな人と友達になつてはいけない。」と遊び仲間を遠ざける。遊びを取り上げられた幼児は、子供としての生活を歪められ、大人になるために必要な道筋を通らせてもらえない結果になるのである。

二、運動訓練と運動遊び(体育遊び)は違う

―遊びと技能訓練は同じではない。―
幼児の体力づくりを標榜して対策している幼稚園、裸訓練をしている保育所など多く、幼児の水泳教室も大繁盛である。然しこれらの中には運動遊び、体育遊びと言えないものも少なくない。それは、一定の運動内容や技能の型を、その定まった方法通り反復練習させているのであって、まさしく技能訓練と

呼ぶべきものである。これは遊びとは言い難い。遊びは技能の向上のための訓練を直接の目的とはしていない。

遊びは興味を追う楽しさ、全力を発揮する楽しさ、人と競う面白さ、いろいろの駆け引きで争う面白さ、難しいことに挑み、やり遂げる充足感、終わった後の満足感などにひかれて熱中する活動である。従って方法や技能については遊ぶ子供が選ぶものである。もちろん遊ぶためには共通のルールがあるし、自ら用いる技能の枠も決まってくる。然し細い所まで技能の型ややり方が強制されては遊べない。子供の興味と喜びに支えられて努力し、工夫していく過程で本当の知識や技能が身につくものであり、想像以上に習熟していくし、高度なものなのである。しかもその後の発展につながる基礎的なものである。

三、安全能力は危険を乗り越える事から

「倒れるといかん、歩行器で・・・。」

「危いから走るな。」

「何故そんな危い事を。」など、随時こういう言葉が絶対的な力を持ち過ぎている様に思う。この言葉が出てくる態度が今の子供を、そして三十才以下の人間をどれだけ無能にし、無知にし、無気力にしているのかという事を痛感しているのは私だけではない。

乳児は「這い這いし」、「伝い歩きし」つつ立ち、歩く事を憶えていく。立って歩けるようになる迄の過程において、倒れては立ち、倒れては立ち、一步踏み出しては倒れて又立って一步を踏み出しして、大脳の

発達と筋骨の発達を促して、平均をとることを憶え、歩く能力をつけていくのである。同時に情緒が安定し、意欲のある人間の基礎を作っていく。

次いで走る事を憶える段階でも、跳ぶ力が出来る段階でも同様である。以後の生活(遊び)における身体行動の総てでこの方式を通して成長への道を進むのである。

「此の遊具は安全ですか。」という問いをよく受ける。安全は大切な事だが、絶対安全という遊具は存在しないだろう。若しあるとしたら恐らく子供は絶対に遊ばないだろう。

生れて半年近くも経てばすでに色や音や形や動きに意欲的に動き出す。以後遊び及び遊びの道具はどんどん広がっていく。それは知能及び体力技能の発達に依りてより危険度の高いものへと進んでいく。

子供の活動では、失敗はつきものであり失敗せずにはうまくやれる事ばかりなら、進歩も向上も無いわけである。小さい失敗を繰り返して失敗しないようになる。未熟な技で繰り返し挑んでいるうちに習熟するので、そこでより高い技へと挑戦していくのである。未熟と失敗を永遠に反覆して向上していくのが人間である。従って未熟や失敗は必然的に危険を伴うものであり、小さな危険を反覆乗り越えて、より大きな危険を防ぐ力が育っていくのである。

近頃の青少年の骨折の過多、及び無気力化、無関心、無感動などの諸現象も毎日の「危いから止めとけ。」式の過保護・過待避・過補助的生活に負う所が大きいと思われる。

危険に近寄らない事は、危険防止の第一義だろうが、同時に無気力、無能人間を作るための要諦でも

ある。

小さな危険を身をもって体験する。それに見合った知識及び技能を含む安全能力が身について来る。楽しい遊びに伴う、いろいろの危険を経験しより幅広い安全に対する知識と技能も身について、より大きな危険に対する対応能力が出来るのである。このような小さな然し広い危険を経験しないで育った者程恐ろしいことはない。

四、幼児の体育遊びを進めるために

子供の遊びを奪っているのは、親と教師と社会であるから、正常化していくのも親と教師(園)と社会の三面からの改善であるのは当然である。

○親の子育て

「子には苦勞させない。」危いことから保護する。「式の育て方のよくない事は前述した。子供に苦勞・苦心・努力を体験させていくのが親の務めである。子供のやる事を代わってやるというのは子供の発育成長を邪魔している事になるという基本認識をしっかり持って、大筋は押えながらあとは「子供のやる事をみていてやる。」という育て方をしていかなければならない。

○教師の指導力

家庭が過保護に陥り、社会環境が遊びを奪った今日幼稚園・保育所・小学校等での指導力が非常に重要になってくる。然し教師の力が低いのではという一般の声も多い。教師の指導力として重要なものは何だろう。

ア、子供を見つめる能力を養う。

集団教育の場で一人一人の子供の健康状態・心理状態を素早く観察し判断する力を養っていく事が大切で、その子供の集団が教師に何を求めているのか、遊びの中で真から喜んで活動しているか、積極的に動いているか、やる気を失ったり反集团的・非集団的な言動をしていないかなどをすぐ見分け、対策をとらねばならない。この様な力を今の養成機関は育て様としていられるだろうか。

イ、集団指導の技能と臨機応変に遊びを用意する能力
集団とは同じ粒のもので、全体を一律に扱う事だと思われがちだがそうではない。メンバーの一人一人は体力・気質・能力など皆違い、その違う個性を持った多くの一人一人が喜びと生き甲斐をもって活動するように扱う事が大切だが、現実の先生方にその考え方や指導技能が欠けている人が多い。

教師主体の計画を押し付けるのではなく、子供の欲求をうまく捉えて教師の計画を調整する重要である。子供の体調・興味・活動の変化・集団の意識の流れに敏感に判断して対応していく能力があれば、子供達は常に生き生き活動に没頭するであろう。
ウ、恐怖心を起させない。

初めから深いところで水泳を教えようとする。いきなり水中顔をつける訓練をする。高いところに無理に上げる。不安定な姿勢にさせたりその挙句落ちる。などといった経験を最初にさせるとその遊びを絶対しようとしなくなる。成長してきてその運動をする意志が湧いてきた時でも、意志に反して体が動かないと言う場合すらある。恐がらせてはならない。工、劣等感を懐かせない。

「貴方はなんでそんなに下手なの。」「あなたほど

下手な人ないわ。」を繰り返したらその人はやる気のない人間に確実になる。努力やその子なりの特徴を認めないで出来映えだけを比較し他人との比較ばかりやる事は禁物である。喜びと自信を持たせるのが指導力である。

オ、退屈・不満感・不充足感無用
折角やる気であるのに、分かり切った説明が長々と続けば、待つばかりで一寸も順番が廻ってこない。調子よく遊んでいる時子供が必要としない注意を与える為に停める。力を十分に必要としないやさしいことばかりさせる。十分楽しむところまで行かないうちに終わりになる。と言うようなことが続く。真剣に取り組むことをしない習慣が身についてしまう。
カ、ルール違反を見逃さない。

約束をたくさん押しつけて、それが守られなくても無頓着な指導者が多い。このような経験が重なる。「決まりは守らなくてもよいもの。」と意識する。恐ろしい事だ。約束は最小限に留める。その時々約束は一つか二つにする。その代わり決めた事は必ず守らせる。「守ることがその遊びをより面白く皆が楽しく遊べるのだ。」という事がわかるようになる。「約束したら守られる。」などと思ったら大間違いである。「守ってこそ皆が楽しい。」と言う経験のみが、きまりを守る習性を育てるのだ。

○社会環境の改善・整備について

非常に重要であるが非常に難しい。環境としては児童公園・幼児プール・児童体育館・児童屋外運動場を作るとか、民間道路での遊びの保障などの物的な面と、子供の育成、子供集団の復活、そのための社会通念の転換等の心的・組織的・活動的な面がある。

五、園やセンターなどの施設について

遊びのためには遊ぶ場が必要である。場としては、人的な遊び仲間、遊ぶ集団、遊ぶ組織と、物的な遊び場所・遊び用具・器具・施設がある。ここでは物的な場の内の遊びの施設について述べてみよう。

○遊べる遊具施設と遊べない遊具施設

カタログにある多くの華やかな遊具施設が多く設置されているが、よく遊べない物が多い。よく遊べるとは次の様なものである。

ア、敏捷に動けるもの、速さ比べ、追い合い、変化のある動きの出来るもの。

イ、鬼遊びの出来るもの。敏捷に逃げられなくてすぐ捕まる構造では遊ばない。

ウ、技能的に面白いもの。他の道具では味わえない独特の技を発揮するもの。(ブランコ・滑り台・回旋・雲梯・つり輪・登り棒等)その技を高めていけるとか工夫して多くの変化技ができるもの。
エ、多数が同時に動き廻れるもの。うまくない子のため或場所ですまっても、すぐ横道へ逸れる構造になつていないと厭きられる。

オ、総合的な遊具施設では、いろいろな動きの機能が同時に使えること。或部位で遊ぶと他の部位が邪魔されて遊べないと言うのでは意味がない。力、安定して倒れるおそれがなく、形や色の美しいもの。

以上の点から具体例を二―三挙げてみる。

・登り棒は間隔が狭いと訓練用具にしか使えない。間隔を四〇―五〇程度にして林立させるとよく遊ぶ。
・雲梯は二―三人並べる幅(九〇―一五〇)にする

とよく遊ぶが、狭いと(五〇糎)訓練用具になってしまふ。

・滑り台は踊場を広くし、登り道を多く作る。滑り道では、広幅底板式・二本棒(直径六〇糎パイプ)式手摺状角棒(二〇×三〇糎)式などが面白い。

・ブランコは、側方に交替口のある柵付、二連式が、多様な遊びが出来る上、衝突防止が出来てよい。

尚すべての施設はコンクリート据付ではなくて、移動可能型が望ましい。

・プールは、各園の状況に合った広さ形で作ればよく、狭くてもよく遊べる設計が可能である。最深時四〇―六〇糎にする。渚や浅瀬を一方或は周囲に作る必要がある。尚水泳に使わない時は、水を抜きお家ごつこなどで年間使うようにするがよい。

最後に保育センターの遊具施設について

ここは野外保育が生命である。自然の山は斜面で成り立つ。そこに笹や薄や灌木が繁り、各種の大木が森をなしていて鳥や虫がいっぱいいる。これを最大限に利用することが大切で、自然に恵まれない市街地園用の施設や公園遊具を持ってきても意味がない様に思う。

斜面と草木と木立をうまく活かした施設作りをしてほしいものであり、利用する側もそれを忘れないでもらいたい。

〇結び

遊びを奪われ、遊びに熱中して成長した経験の乏しい年齢層によって家庭内暴力。学校暴力・非行・反社会暴力・犯罪が頻発させられている。暴力・非

行の反対に自閉的・不適応的な現象も非常に多い。我が国の三十才以下の者の身体精神は、未熟と老化が併行した状態であると案じられている。今にして正さなければ、二十年先の我が国の暗澹たるものと言わざるを得ない。

子供達に遊びを、子供達よ遊びを！と腹の底から叫ぶものである。



八瀬野外保育センターでの公開保育

京都新聞(夕刊)

こちら編集局
市民相談課です

昭和五十一年五月七日(金曜日)

すすすすく たくましく

ふえてきた学校でのケガ

風薫る五月の訪れ。この春、小学校に入学した一年生もようやく学校になれたころ。風に泳ぐコイのように元気いっぱい走りまわる時期でもある。だが子供たちのケガは年々増えている。「子供たちはモロくなった」、二十年先は、どんなおとなになるだろう「学校現場は真面目に心配する声も。ケガの現状と強くたくましい子供づくりを模索する先生たちの取り組みを追ってみると」。

京都っ子のケガ全国6位

保護者にとって、先生にとって、子供のケガほど心配で不安なものはない。そのケガが年々増加の傾向なのだ。

京都府学校安全会が最近まとめた学校災害共済給付金の四十九年度の給付件数は府全体で二万二千六百二十五件。災害共済給付金は、子供が学校管理下でケガをしたとき、治療費の一部を負担する一種の保険制度。

給付率は児童・生徒百人に対し四・一五人が受け

た勘定で、これは全国第八位という高いランクだ。

このうち京都市内の子供たちのケガは六千七百五十九件。三十五年度は三千九百三十三件、四十一年度四千四百三十件、四十三年度五千七十三件、四十六年度六千四百六十六件：と。年々確実に増えている。五十年度はまだまとまっていないが、市教委保健体育課の三月までの中間集計(年間集計ができるのは五月末)では、すでに五千八百二十一件のぼっている。

四十九年度のデータで、市教委関係のとくに小学生のケガの中身をみてみると、ねんざ、骨折、頭部打撲といったケガが意外に高い比率で目立つこと。

「なぜいまの子供はこんなにモロイのか」と、現場の先生たちに危機感をさえ抱かせている現状なのだ。「とにかくすぐ骨を折る」というのが関係者の共通の印象なのである。

ちなみに数字をあげると小学生のケガ四千六百八十二件のうち、トップは、すりむいたというザ創で九百七十九件(二〇・九パーセント)二位はねんざの九百十三件(一九・五パーセント)三位骨折で六百六十八件(一四・三パーセント)四位が身体(頭部を除く)の打撲六百五件(一一・九パーセント)そして五位が頭部の打撲で三百三十四件(七・一パーセント)と続くのだ。

ケガの起きる時間帯は決して交通禍にさらされている通学時などではない。休憩時間が五七・七パーセントでもっとも多く、二番目は体育などの授業時間中で二六・七パーセントと高い率を占めている。先生たちが危機感を抱く原因は原因は実にこのへんにあるのだ。

ステンと転び、アツ骨折

学校から市教委へ届けられる事故報告書のつづりからケガをする「魔の瞬間」を拾ってみると――。

【その一、体育授業中】

六年生女児。マット運動の予定で片足跳びの準備運動中、マットのはしにつまずいて転倒。右足骨折。

【その二、休憩時】

五年生女児。友だちとボール遊び中。飛んできたドッジボールを受けそこね、右中指の骨折。(市教委保健体育課の話「以前ならこの程度だと突き指ぐらいで済んだのですが……」)

【その三、休憩時】

四年生男児。ドッジボール遊びで勢いよくバック。そのさい右足がねじれて足首のねんざ。すねの骨折。

【その四、遠足で】

四年生の女児。久しぶりに広々とした緑の芝生。うれしくなって走ったが、つまずいて前のめりに転び、両手をついたところ右腕の骨折。

【その五、授業終了時】

三年生の女児。午後の授業が終わってよいよい下校。「先生さようなら」とあいさつした拍子に、机の横に置いていたカバンにつまずき転び、左足の骨折。

【その六、放課後】

三年生の男児。回転シーソーで楽しく遊んでいる最中、相手が手をはなしたはずみで転び、胸部打撲で六日間のケガ。

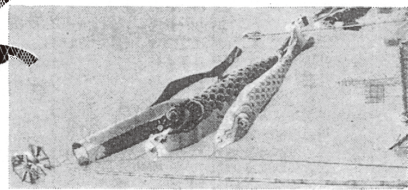
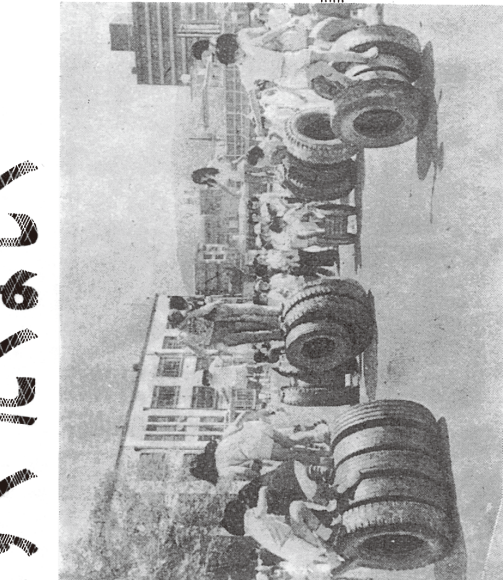
【その七、放課後】

四年生の男児。フランク遊びをしようと、飛び乗ったが失敗。しりもちをつき同時に地面についた両手

すずくたくましく



昭和51年5月7日 金曜日



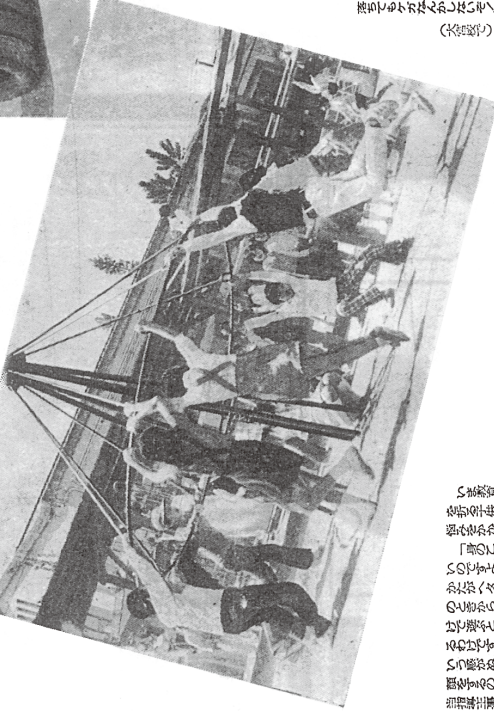
「すずくたくましく」は、昭和51年5月7日、京都府立第一中学校の体育授業の様子を写したものである。この授業は、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。

遊びを通して強い子に

遊びを通して強い子に。これは、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。

広がる体力・人間づくり

広がる体力・人間づくり。これは、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。



現代っ子は鈍くさい? これは、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。

京都っ子のケガ全国6位

京都っ子のケガ全国6位。これは、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。

ステレオと転びアッ骨折

ステレオと転びアッ骨折。これは、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。

現代っ子は鈍くさい?

現代っ子は鈍くさい? これは、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。

広がる体力・人間づくり

広がる体力・人間づくり。これは、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。

現代っ子は鈍くさい? これは、児童の体力増進と集団生活の学習を目的として行われた。児童たちは、大きなタイヤを順番に持ち回し、協力して動かすという活動を行った。また、プールでは、魚の形をした道具を使った水泳の練習が行われた。この授業を通じて、児童たちは健康な体づくりと協調性を学ぶ機会を得た。

の指の骨折。

【その八、体育時】

三年生の女兒。三人一組で手をつなぎ、順番にその間を飛ぶ運動をしていたら、一人がこけて前歯を折る。

一子供たちが学校で元気に遊んだり、運動しているのはいいのだが、先生たちは授業中、放課後を問わず、ハラハラの連続という状況。

遊びを通して強い子に

「正月に食べるモチね、機械でついたのと手でついたのでは、ねばりが違いますやろ。身体も同じことで、幼児期からねっとかんとあかんです。京都のケガ発生件数が多いのは『過剰治療』のためですわ。赤チン塗ったらすむものを医者へ連れていく。まあ最近の子供の事故をめぐる世の中の動きからしたら現場の先生の心配は無理ないことですけど…。

しかし私は骨折はケガでないと先生にハッパかけてますね」と、これまで危険だと使用が制限されていた回旋塔やタワー・ジャングルジムなど遊具を積極的に学校に導入してきた安田祐治・本能校長は、体力づくりの哲学を披露する。

戦後、従来のタテ社会がどんどん希薄になって、子供の世界でもガキ大将が姿を消した。隣り近所で集まるのは同学年、同年齢の子供たちで、こうなる何代にもわたって伝えられてきたワンパク遊びが途絶えてしまった。まして遊び場を奪われた子供たちに、自ら遊びを工夫せよといっても無理。上手な子供が下手な子供に遊び方、運動のしかたを教える、

そんな場をつくるには学校に一年から六年までの子が共通に遊べる遊具を置く以外にない。こんな考え方から安田校長は、さる四十七年に校長として赴任した南区・東和校で遊具導入を始めた。

新考案したタワー・ジム、修理して再び使用できるようにしたスベリ塔、やはり修理改造の登り棒ジム、回旋塔、電柱廃材を利用した丸太平均台などをどしどし校庭に設置。そして危険を理由に使用制限されていたものも全面解除してどの学年も自由に使えるようにした。

学校内外でケガや事故への不安の声がウズ巻いた。事実、安田校長が赴任する前の四十六年度のケガは五十五人（うち遊具でのケガ十四人）だったのが四十七年度は七十一人（同二十九人）と急増、遊具によるものは二倍に八人上がった。だが四十八年には二十九人（同十人）と激減。「思いつきり遊べるようになったら、ケガの心配は不要」とする安田校長の考えが立証された。

安田校長は四十九年四月、北区・大宮校に転任、さらにこの四月、中京区・本能校に移ったが、大宮校でも禁じられた遊びが次々復活され、いまでは先生たちも「少々の冒険とスリル。いつも遊んでいる子は平衡感覚と運動神経も発達して、めったにケガはしませんよ」というまでになった。

安田校長は本能校でもこの考えを進めていくという。

広がる体力・人間づくり

東和校や大宮校ばかりでない。モロイ子供の悩み

の中から、たくましい子、強い子、規律正しい子を目指し、いまいくつかの学校で新しい取り組みが始まっている。それを紹介すると―。

【左京・三錦校】川元優校長「狭い運動場を有効に使うため移動式の遊具を設置。始業前、昼休み、放課後に教師が遊びの指導をしている。近くの自然環境も利用しようと、月一回は大文字山や吉田山、若王子山に登る。またPTAと共催で年六回歩こう会を実施します。また授業時間も月曜は一時間多く七時限までとするかわり火曜は一時間力ツトして五時限目までにし、従来の木曜日と合わせ週二回、放課後の遊びの時間を設けています」

【東山・有濟校】油利清教頭「遊びの中で体力とともに人間関係づくりをするため体育主任を中心に大きな古タイヤ二個を組み合わせた『車輪』を開発、運動場にたくさん置いて子供たちに『玉乗り』させます。一、二年生は初めこわごわでしたがいまは全児童が奪い合いで遊んでいます」

【山科・百々校】吉川昇教頭「一時限と二時限の間の休み時間に全校一斉の体育をさせています。学期ごとにテーマを決めて個人カードに記録しているわけですが、もう休憩時に教室に閉じ込められている子はなくなりました」

【上京・成逸校】桂誠一校長「体力づくりを重点に高度な手作りの体育・遊具施設を置き放課後などに活用させています。とにかく、子供たち自からに、遊びや運動への興味を抱かせることが大切なんです」

【中京・富有校】山本弥寿夫教頭「午前中の休憩時を利用して中間体育、独自のカリキュラムを組んだ体育授業で強い子づくりを進めています。子供たち

はジャングルジムに高さ四十センチの平均台を斜めにひっかけてその上を歩きますが、ハラハラするところもある。だが敏しょうようになって大きなケガはしなくなりました」

現代っ子は鈍くさい？

いま教育界は、簡単に転び、骨を折る子供たちのモロさに深刻な悩みをかかえている。

「身のこなしの訓練ができてないのですよ。何と
いうか、こけかたがへタクソなんですな。幼児のときから泥まみれ、すり傷だらけで遊ぶということが不足しているわけですね。全体に温室育ちという感がぬぐえない」と、シブイ顔をするのは市教委の保健体育担当指導主事の守谷正巳さん。

こんなデータがある。さる三月三日、京都市北区の大宮校で開かれた京都市小学校校体育研究会の研究発表会での報告。

市内十六校の五、六年生千七百七十人を対象に昨

年十月の一週間、遊び・運動の生活実態をアンケート調査したものだ。が、六年生を例にとると、学校・校外合わせて一日あたりの遊び・運動時間は男児で時間十五分余。女児で五十五分足らず。日曜でさえも男児が二時間四十分、女児一時間二十五分程度という、先生がたにとってショッキングな結果が出た。放課後や休日のほとんどの時間をテレビや勉強、いろんな塾通いで使っているというわけ。

この貴重な遊び時間に彼らは何をしているかといえば、男児がキャッチボールや自転車、女児がバトミントン、ナワ跳びなど、道路でできて少人数、運動量の少ないものが目立った。

こうした実態に指導主事の一人は「昭和二十年代には二時間以上屋外で、しかも冒険ごっこなど運動量の大きな遊びをしたものですがねエ」とタメ息をもらした。

一方、向坂邦隆・保健体育課主幹は、子供たちのモロさについて次のように分析する。

過熱一途の受験競争や自宅周辺の遊び場を次々と

奪う交通量の激増など、社会情勢の大きな変化はも
ちるんだが、もっと大きな要素は各家庭の過保護だ
と思います。核家族化が進んで子供の数も一昔前
くらべて減っていますね。一家庭二人というのが平
均的ではないでしょうか。子供への目が行き届き
ぎて、乳児の時期から、ちよつと危ない行動をする
と「危険だ」とストップをかける。子供たちは危険
を知らないまま成長する。それはそれでいいことな
のでしょうが、結局、倒れかたも知らない子供にな
るんですね」と。体育の研修会を開くと、幼稚園の
先生からは「園児に駆けっこをさせても全力疾走が
できない」また小学校の先生からは「運動場で思い切
り遊んでみると、教室から追い出すが、自ら遊びを
つくり出す姿が見られない」など、悩みを訴える声
が多いという。

「親は、子供のしていることを奪うな！」

これが現場の先生から過保護両親への注文。子供
自身の経験が増え、結果的にたくましい子供に育て
ることにつながるからだ。

京都新聞(夕刊)

昭和五十一年三月十日(水曜日)

多少の危険こそ楽しいの

北区・大宮校

「現在の子供は遊ばない」って？ テレビ、マンガ、塾通い。でも、見てください。この元気な、生き生きとしたチビッコたちを。

道路は危険。公園は遠い。「勉強しなさい」とやましく言われる。学校のグラウンドからさえ、危険防止とか、狭過ぎるなどと言われて締め出されがち。これでは都会の子供たちが遊べないのも当たり前。

京都市北区・大宮校。神経質なおとなが見たら「危険だらけ」の遊具がいっぱい。だが、先生たちは自信たっぷり。「子供たちは安全づくめの遊具では、ちっとも楽しくないのです。少々の冒険とスリル。いつも遊んでる子は平衡感覚も運動神経も発達して、めったに、けがなんかしませんよ」。子供たちの間でいつの間にかルールが芽生え、友だちもふえ、健康な身体と健全な心が。それが本当の子供です。

第33926号

京 都 新 聞 (夕 刊)

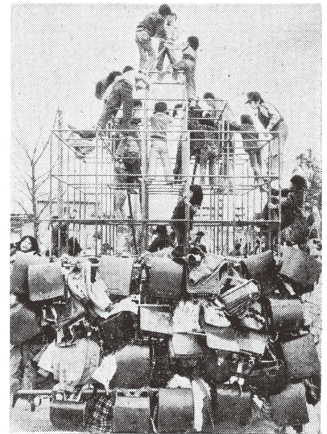
昭和51年3月10日 水曜日



多少の危険こそ楽しいの

北区・大宮校

「現在の子どもは遊ばない」といふ、
大人たちの「危ない」が、
子どもたちの「楽しい」の
対比が、この写真の中心に
あがっている。公園遊具は、
安全を第一と考えるが、
子どもたちは、
「安全」を第一としない。安全は、
運動神経を育て、
心身の健康を育て、
手先の器用さを育て、
友達と遊ぶ楽しさを育て、
それが、
本来の子供です。



遊び

市小学校体育研究集会

大宮校の先生が考案の遊具
児童、楽しく披露

「目の色が違うネ」

京都市小学校体育研究会(藤井芳男会長)の研究集会が三日午後、北区・大宮校(安田祐治校長)で開かれ同校の先生たちが考案、試作した多くの工夫に富んだ遊具で、楽しく遊ぶ児童たちの姿も披露され、訪れた約百五十人の他校の先生たちの関心を集めた。同校で、遊びの中で、子供たちが体を鍛えるとともに、創意工夫、友情、社会性などを養うことを重視、遊具の開発や設置に力を入れているモデル校的存在。研究集会では、参加した先生たちが、午後二時から約一時間、三年以下の児童たちが、遊具を使って遊んでいる様子を観察した。

数ある遊具の中でも、他校の先生たちを驚かせたのが、幅が約九十センチ、台座の上に鉄棒がついている同校先生たち創意の「総合すべり台」。鉄棒部分に足をかけ、滑り台めがけて、大きくジャンプする

遊び

市小学校体育研究集会

時間も場所も仲間も不足

「目の色が違うネ」
大宮校の先生が考案の遊具
児童、楽しく披露

身につかぬ社会性

実態報告

「目の色が違うネ」
京都市小学校体育研究会(藤井芳男会長)の研究集会が三日午後、北区・大宮校(安田祐治校長)で開かれ同校の先生たちが考案、試作した多くの工夫に富んだ遊具で、楽しく遊ぶ児童たちの姿も披露され、訪れた約百五十人の他校の先生たちの関心を集めた。同校で、遊びの中で、子供たちが体を鍛えるとともに、創意工夫、友情、社会性などを養うことを重視、遊具の開発や設置に力を入れているモデル校的存在。研究集会では、参加した先生たちが、午後二時から約一時間、三年以下の児童たちが、遊具を使って遊んでいる様子を観察した。



遊具で楽しく遊ぶ児童たち

遊具で楽しく遊ぶ児童たち
この遊具は、大宮校の先生たちが考案、試作したもので、幅が約九十センチ、台座の上に鉄棒がついている。鉄棒部分に足をかけ、滑り台めがけて、大きくジャンプする。この遊具は、大宮校の先生たちが考案、試作したもので、幅が約九十センチ、台座の上に鉄棒がついている。鉄棒部分に足をかけ、滑り台めがけて、大きくジャンプする。

「目の色が違うネ」
大宮校の先生が考案の遊具
児童、楽しく披露
身につかぬ社会性
実態報告
この遊具は、大宮校の先生たちが考案、試作したもので、幅が約九十センチ、台座の上に鉄棒がついている。鉄棒部分に足をかけ、滑り台めがけて、大きくジャンプする。この遊具は、大宮校の先生たちが考案、試作したもので、幅が約九十センチ、台座の上に鉄棒がついている。鉄棒部分に足をかけ、滑り台めがけて、大きくジャンプする。

飛行機跳び、はた目には「危険」と映る光景だが、子供たちは平気な顔、ドシンと大きなシリもちをつきながら次々と滑りおり、いかにも楽しそう。

このほか、移動式にし、取手部分に工夫がこらされた回旋(せん)塔、倒れないように改造して後部で鉄棒遊びなどができるサッカーゴール、棒滑りのついたジャングルジムなど、他校ではみられない遊具がずらり。歓声を上げ元気に遊び回る様子に、他校の先生たちは「子供の目の色が違う。ほかの学校では、危険と禁止していることが、ここでは楽しく子供たちがやっている」「子供はやっぱり、ある程度スリルのある遊具でないと喜ばないが」などと関心したり、教えられたりしたようだった。

研究集会では、このあと、講堂で健康教育のための子供の実態調査結果やスポーツテスト結果などが報告された。

時間も場所も仲間も不足

実態報告

いまの小学生は、時間と場所、仲間の不足から、遊ぶことをきわめて制限されている―三日、京都市北

区・大宮校で開かれた京都市小学校体育研究会の研究集会で、こんな実態調査の結果が報告された。

身につかぬ社会性

調査をしたのは、同研究会内に設けられた健康教育の課題と対策委員会。市内十六校の五、六年生千七百七十人を対象に、昨年十月の一週間、遊び・運動を中心に生活の実態を調べた。

その結果、月曜―土曜間の登校する日の平均では、六年生を例にとると、男子の場合、校外で遊んだり、運動する時間は三十九分、学校での遊び・運動は三十七・六分、両方合わせても一時間十五分余。これに対してテレビ・ラジオの時間は二時間十五分近くあり、家の中の自由時間も一時間余り。一方、勉強で一時間十二分、塾やけいこ事三十六分、読書十三・八分など。睡眠時間を除いた十四時間余の中で、遊び・運動の時間が少ないのが目立った。六年女子の場合は、さらに少なく、校外ではわずか十五分、学校での遊び・運動は四十分足らずだった。日曜日には遊び・運動時間が男子で二時間四十分、女子で一時間二十五分にふえるが、テレビ・ラジオと自由時間も男女とも五時間もあり、遊び・運動時間はやは

り少なかった。

一方、遊びの場所をみると、月―土曜日のほとんどが学校内だが日曜日は、道路や公園、家の中が大半。遊びの内容も、校外でのものは、男子でキャッチボールや自転車、女子でバトミントンやナワとびなどが多く、道路ででき、しかも少人数、運動量も少ないものが多かった。

さらに週明けに一週間のまとめを聞いたところ、遊び・運動の時間が少なかったとする者が男子で四〇パーセント、女子で五六パーセントも。少なかった理由として「時間がない」が男子で五七パーセント、女子五九パーセント、「仲間がない」が男子一六パーセント、女子一三パーセント、「場所がない」男女とも約一〇パーセントと、この三つの理由が大半を占めた。この結果に、同対策委の土田謹一教諭(太秦校)は「戦前や戦後間もなくは二、三時間は遊んでいた。それがいまではテレビや自由時間と逆転している」と指摘。遊びの場所や内容についても「道路などしか遊び場がないため、運動効果の薄い遊びしかできない。しかも核家族化や塾ばやりで、遊び仲間も少ない。これでは社会性は身につかない」と分析。そして「こうしたマイナス面をカバーする体育教育が必要」と、集会に参加した先生たちに訴えた。

遊びを取り戻す

安田大宮校校長

禁じられた遊具解禁…大きな成果

最近、遊べない子供がふえている。とくに冬休みなど、家のなかでただブラブラするだけの子が多い。「外で遊んどいで…」といったら、「たまの休みぐらい、ゆっくりさせてえな」。おとながドキリとするような返事だ。そんな子供たちの世界に、もう一度遊びを取り戻そうと、京都市立大宮校の校長、安田祐治さん(五十五)は、いま学校の内外にある「禁じられた遊び」を一つずつ復活させる運動を進めている。ハダシで遊ぶことを大いに奨励し、ブランコの振り飛びなども「解禁」にした。さらに子らが思う存分使いこなせる新しい遊具の製作も…。「心配されたケガも減っており、子供たちはずい分遊べるようになった」と安田さん。ことしは、子らのいっそうの飛躍にかけたいと、張りきっている。

ハダシ奨励、遊具も考案
事故激減、児童ら活動的に

京都市北区西賀茂の大宮校。校長室はストロームつけず、いつも窓を開け放してある。運動場に面したその一角から黄色い声が飛んだ。「コーチョコーセンセエ、二年生の人がいっつも替わってくれはれへんね」。みると、自分の背丈より高い壁をよじ登って、一年の女の子が数人、窓ワクにぶら下がっている。「オーイ。その五年生。ちゃんと遊ぶ順番を決めてやらんかい」。しわがれ声は安田さんだ。

「子供が遊ぶというのは、体力をつけるだけやないんですわ。こうして遊びながら、知らず知らずのうちには人と人とのつき合い方、社会のなかでの約束事などを学びとっていく。子供には遊びもまた大事な学習なんですよ」。

安田さんの運動とは、一言でいうならおとなによって奪われた遊び空間を子供たちに返還する。それが最大の目標だ。

スタートは昭和四十七年、南区・東和校の校長に赴任していらい。「十四年間、市教委にいて、久しぶりに現場へ戻ってみると、子供たちが全く遊べなくなっていた。調べてみると、家庭でも学校でも、いつもおとなは子供がけがをしないかと、必要以上に神経をとがらせている。こんなことをしていたら、いままに自立性のない人間ばっかりになってしまう。町から遊び場がなくなったのなら、学校の運動場を魅力あるものにしよう。そう思って、禁札のかかった遊具の使用をいっさい解禁することにしたんですよ」。

安田さんは、それから二年後の昨年春、現在の大宮校へ転任。ここでも同様の運動を展開中である。この三年間に、安田さんの周辺で起きたおもな出来事を拾ってみると。

まず前任の東和校では、一学期早々に「運動場では全員ハダシになるう」と提唱した。また、校庭にあるブランコやシーソー、雲梯(うんてい)などで、「危険だから」と、永年、児童に使わせていなかった遊具を一つずつ修理し、すべてだれもが自由に使えるようにする。その結果、子供のけがは前年度の二倍強。

さっそくのこと周囲からは「校長は子供をモルモット代わりにしている」といった非難の声が出た。だが、安田さんはとりあわない。「けがを恐れていたら、児童はいつまでもたっても自由に遊べないやないか」といって…。その翌年には移動式で六本足の回旋塔やすべり台つきのジャングル・ジムを自分で設計し、校庭の遊具の数を思いついて三倍にふやす。ところが子供の負傷事故はこの年を境にして激減した。四十六年度五十五人(うち遊具でのけが十四人)、四十七年度七十一人(同二十九人)、四十八年度二十九人(同十人)といったぐあいである。遊具以外でのけがもともに減って、安田さんの「子供が思いっきり遊べるようになったら、けがの心配など不要」とする考えは、立証された。

そして大宮校では。昨年夏の水泳教室でこんなことがあった。

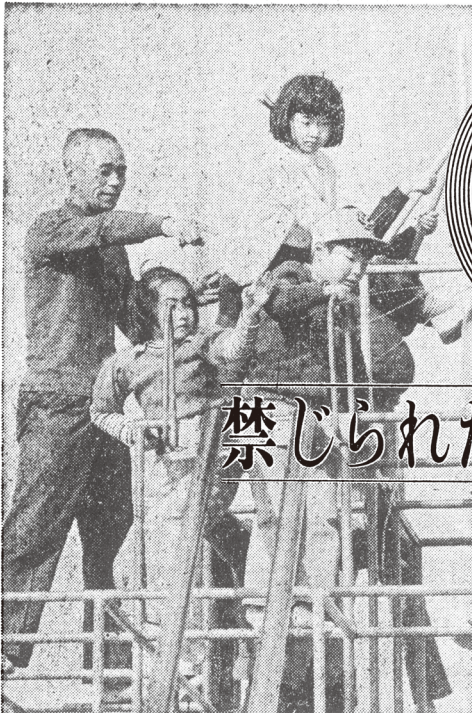
プールサイドを走る子に、クラス担任が何度も「走ったらあかん」と注意する。相変わらず「転んでけがでもされては…」が理由だった。子供の足の裏を見ると、まるで手のひらで歩いたみたいに、かわが破れて、あちこちに血がにじんでいた。

それでもやってくる子はいいい方で、一度も水泳教室に参加しない子がけっこういる。「何で来へんの？」と聞いたら「暑いさかい」とか「家のなかの方が



歴史遊具は千代子で遊んで来た。...

遊びを戻す



禁じられた遊具解禁...大きい成果

安田大宮校長



開けっ放した校長室の意趣しに子どもと語り合う安田校長

ハダシ奨励、遊具も考案

事故激減、児童ら活動的に

「社会のなかの約束事は、学びこらなくてはならない。...

「オーイ、がんばれよ」—ジャングルジムで子らの遊びに仲間入りして...

京都市北区西園寺の大宮校。校長室は「オーイ」の掛け声で...

「遊具も考案」... 遊具の考案は、遊具の考案は...

涼しいもん」という答え。寒くなったら泳ぐ気なのかと、安田さんはがく然となった。

同校で、はだしになることやブランコの振り飛びなど「禁じられた遊び」の解禁と本格的に取り組み始めたのは、二学期に入ってからである。東和校のときと同じで初めのうち子供たちはどう使ったのかわからず、マゴマゴした。安田さんはそんな子らのなかに飛び込んでいって、毎日、いっしょに遊んでやる。

いま、子供たちに人気があるのは新設の回旋塔だ。ブランコの振り飛びと同様、空中遊泳のスリルがたまらなくおもしろい。休み時間は引っぱりダコである。また、ドッジボール遊びの好きな高学年のグループは、このころ毎朝、七時すぎには登校す

るそうだ。陣とりのためというが、管理用務員さんの話だと、「以前とはえらい違いや」。大宮の子らの運動量は、昨年の春先に比べて、確実にふえ始めた。

—突然、チャイムが鳴った。「運動場でまだ遊んでいる人は早く家へ帰りましょう」。校長室の時計がかつきり4時をさしている。男の子が五人ほど顔だけ窓からつき出して、いっせいに「コーチョーセンセエ。なんで帰らんとあかんの。まだ空明るいやん」と叫ぶ。

「先生と、四時になったら帰ると約束したんやろ。約束したことは守らんと、あかんね」。

頭をかきかき、安田さんはこう語る。「毎年十二月以降、冬季の下校時間はいつも三十分早い午後四時と決まっている。正直いって、ただそれだけの

理由なんですわ。出来ることなら、三学期からでも時間延長をしてやりたいと思ってます。まあ、しかし毎年の決まりやからとか、いつもこうだからといったことで、子供の遊びを制約していることが、まだほかにもいろいろあるでしょうな」。

つねに子供の声に耳を傾ける—これがこの人の信条。クルマやビルに遊び空間を奪われて、そのあげく「保育器」のなかで育てられようとしていた子らにとってはその声のなかに育てられようとしていた子ら職員や父兄の理解と協力があって初めてやれることと、この運動の輪をどうやって広げていくか、注目したい。

安田祐治 履歴書

氏名 安田祐治

生年月日 大正八年五月二十八日生

左記の通り相違ございません

昭和五十六年十一月十八日

本籍 京都市右京区太秦中山町二番地の二
現住所 京都市右京区太秦中山町二番地の二

学業

昭和十四年三月二十三日 京都府師範学校 本科第一部 卒業
昭和十八年十二月九日 京都府師範学校 研究科(三ヶ月) 終了

資格・免許

昭和十四年三月三十一日 小学校本科正教員免許
昭和十九年三月二十二日 師範学校・中学校・高等女学校教員(体操科)免許(文檢)
昭和二十四年九月一日 高等学校普通二級教員(保健体育科)免許
昭和二十九年十二月一日 中学校普通一級教員(保健体育科)免許
昭和三十一年三月三十一日 小学校普通一級教員免許
昭和四十一年三月三十日 幼稚園普通二級教員免許

職歴

昭和十四年三月三十一日 京都府竹野郡豊栄尋常高等小学校訓導
昭和十七年三月三十一日 京都市朱雀第八国民学校訓導
昭和二十一年四月五日 京都師範学校附属国民学校訓導
昭和三十一年四月一日 後、制度改定により京都学芸大学附属京都小学校教諭
京都市立貞教小学校教諭
昭和三十三年四月一日 京都市教育委員会指導委員
後、制度改定により教科指導主事、さらに指導主事となる。
昭和四十年四月 京都学芸大学 非常勤講師(体育専門相撲兼職 六周年)
昭和四十七年四月一日 京都市立東和小学校校長

昭和四十九年四月一日 京都市立大宮小学校校長

昭和五十一年四月一日 京都市立本能小学校校長

昭和五十四年三月三十一日 退職

昭和五十五年四月 京都教育大学 非常勤講師(体育小学校専門) 一年間

表彰等

昭和五十一年十一月二日 日本キリスト教青年会同盟より永年の体育奉仕により感謝状
昭和五十二年十一月二十九日 財団法人日本学校体育研究連合会(後援文部省)より表彰状
昭和五十四年五月九日 京都市小学校体育研究会より感謝状
昭和五十六年十月十一日 京都府スキー連盟創立五十周年記念式典において表彰状

著作

○たのしい体育遊び—遊び方と指導案— 昭和四十三年 自費出版 安田祐治篇
昭和四十九年 KKタイムス 他四名共著
(理論篇並に各論 P2-17 P40-50 P76-84 P102-113 P129-144)
○小学校教材・教員の活用 昭和四十六年 帝国地方行政学会 梅本二郎他編
(開発遊具の設計図と写真 P33-94)
昭和四十八年 KK大修館書店 松田岩男編
○現代学校体育大事典 昭和五十六年 新版 宇土正彦編
(学習指導の過程 P128-142) (問題に対応した体育の学習指導 P147-152)
昭和四十九年 明治図書出版KK 梅本二郎編
○体育科学習のつまづき事例研究
(六年のつまづき例と指導 P178-200)
昭和五十二年 KK京洛社 安田祐治監修
○幼児の健康と体育遊び
(体育遊びとその内容 P16-30)
昭和五十六年 KK大修館書店 松延博外編
○子供の遊びスポーツ百科
(いろいろな物で遊ぶ P150-176) (野や林で遊ぶ P192-214) (水辺・水中で遊ぶ P215-252)
(雪の中や氷上で遊ぶ P260-269) (施設で遊ぶ P321-333 Gのうち一部)
昭和五十六年 明治図書出版KK 梅本二郎他編
○小学校体育科指導細案
(体操の指導細案 P35-72)

【幼児教育関係】

○運動会の種目(集) 企画・編集 昭和四十四年 体育遊び研究グループ 安田祐治編

○体育遊びを楽しく段階的に扱う指導(第三回体育遊び講習会)

昭和五十年 体育遊び研究会 安田祐治編

○グループを生かして楽しく遊ぶ指導(第四回体育遊び講習会)

昭和五十一年 体育遊び研究会 安田祐治編

○幼児が自ら興味をもって遊ぶようになる指導(第五回体育遊び講習会)

昭和五十二年 体育遊び研究会 安田祐治編

○多様な楽しい遊びとその指導の手だて(第五回体育遊び講習会)

昭和五十三年 体育遊び研究会 安田祐治編

○時間的に発展する遊びの計画と指導の手だて(第六回体育遊び講習会)

昭和五十四年 体育遊び研究会 安田祐治編

○体育遊びの年間指導計画について 昭和五十五年 体育遊び研究会 安田祐治編

○日常の体育遊びを発展させた行事の在り方とその指導

昭和五十六年 体育遊び研究会 安田祐治編

○研究資料「歌遊び」 分担執筆 昭和五十五年 体育遊び研究会 体育遊び研究会編

【体育施設・体育遊具関係】

○学校及び公園の体育施設・遊具について 昭和四十四年 自費出版 安田祐治

○学校及び公園の体育施設・遊具について 第二部 安全点検の内容 昭和四十六年 自費出版 安田祐治

○学校及び公園の体育施設・遊具について 第三部 体育遊具の批判 昭和四十八年 自費出版 安田祐治

○学校及び公園の体育施設・遊具について 第四部 東和小学校の総合的遊具 昭和四十九年 自費出版 安田祐治

○学校及び公園の体育施設・遊具について 第五部 大宮小学校における遊具と遊び 昭和五十一年 自費出版 安田祐治

○学校及び公園の体育施設・遊具について 第六部 京都小学校に設置しようとしている総合体育遊具 昭和五十三年 自費出版 安田祐治

○学校及び公園の体育施設・遊具について 第七部 子供達は総合体育遊具で存分に楽しむ(指導法)

昭和五十四年 自費出版 安田祐治

【体操関係】

○新しい体操(第一集)第十集) 昭和四十一〜五十年 京都徒手体操研究会 安田祐治編集

○第一回体力づくり調査団参加視察のまとめ その一 昭和四十四年 自費出版 安田祐治

○第一回体力づくり調査団参加視察のまとめ その二 昭和四十四年 自費出版 安田祐治

○京都体操協会 三十年誌 全編執筆 昭和五十年 京都体操協会

○親子で体操 企画・監修 昭和五十一年 楽しい体育研究会

【スポーツ関係】

○楽しいスキー 初心者のための入門書 監修 昭和四十九年 京都シルバースキークラブ 発行代表者 安田祐治

○創立五十周年記念誌 昭和五十六年 京都府スキー連盟

(戦後京都市小学校におけるスキー P63)

○学校水泳指導の手びき 企画・監修 昭和四十九年 京都学校水泳研究会 安田祐治監修

○小学校の子供のたのしいスポーツの手びき 企画・監修 昭和五十一年 京都市小学校・スポーツ教室 指導者連絡協議会

○学校体育におけるすもう指導(第一集)第八集) 昭和三十七〜五十六年 京都学校すもう研究同人 共著

【準教科書関係】

○たのしいたいいく 一年生〜六年生 企画・執筆 昭和三十三〜五十六年 大日本図書KK 佐々木吉蔵他監修 安田祐治編集

○基本の運動五十選 企画・監修・執筆 昭和五十四年 大日本図書KK 共著

論文

【幼児・小学校の体育指導関係】

○私の試みた指導案 低学年九月の指導 昭和三十三年 KK日本体育社

(学校体育十一巻十号 P98)

○子供の遊び 昭和三十四年

(母親教室 五十号 P6)

- その時どんな指導のかたちをとればよいか
(保健と体育 四十三号)
昭和三十七年 日本辞書KK
- 授業研究の具体的方法―現場の立場で―
(学校体育 十巻 六号 P19)
昭和三十八年 KK日本体育社
- 教師の不得意な運動の指導
(学校体育 十七巻 六号 P24)
昭和三十九年 KK日本体育社
- 相撲指導とその留意点(小学校)
(新体育 三十九巻 十一号 P70)
昭和四十四年 KK新体育社
- 総則第三体育を実践面から見ると
(月刊体育 一巻 六号 P22)
昭和四十五年 KK光文書院
- うれしかった授業
(月刊体育 二巻 六号 P66)
昭和四十六年 KK光文書院
- 体育の学指導についての基本的な問題
昭和四十六年 KK大修館書店
- 学習過程の充実とチームの活用
(体育科教育 二十四巻 五号 P29)
昭和五十一年 KK大修館書店
- 到達度評価の考え方生かし方
(体育科教育 二十四巻 十二号 P27)
昭和五十一年 KK大修館書店
- 学習課題の設定と学習の評価
(体育科教育 二十五巻 三号 P24)
昭和五十二年 KK大修館書店
- 子供の遊びを生かした体育指導
(学校体育 三十巻 八号 P21)
昭和五十二年 KK日本体育社
- 学ぶ力を育てる学習指導
(体育科教育 二十五巻 十一号 P27)
昭和五十二年 KK大修館書店
- 夏休みに子供を育てる
(健康なことも 六十九号 P12)
昭和五十三年 日本生活医学研究所
- 事故災害防止のための指導技術
(学校体育 三十一巻 十二号 P80)
昭和五十三年 KK日本体育社
- 運動の楽しさを学ぶ評価の視点
(体育科教育 二十七巻 四号 P22)
昭和五十四年 KK大修館書店
- ひとりひとりを伸ばす体育指導「力試し」
(体育の指導 五十八号)
昭和五十六年 大日本図書KK

- 実りある研究授業、研究協議会のために
(学校体育 三十四巻 七号 P52)
昭和五十六年 KK日本体育社
 - 子供に即した工夫 その一
(学校体育 三十四巻 八号 P4)
昭和五十六年 KK日本体育社
 - 子供に即した工夫 その二
(学校体育 三十四巻 九号 P4)
昭和五十六年 KK日本体育社
 - 子供に即した工夫 その三
(学校体育 三十四巻 十号 P4)
昭和五十六年 KK日本体育社
 - 子供に即した工夫 その四
(学校体育 三十四巻 十一号 P4)
昭和五十六年 KK日本体育社
 - 子供に即した工夫 その五
(学校体育 三十四巻 十二号 P4)
昭和五十六年 KK日本体育社
 - 子供に即した工夫 その六
(学校体育 三十四巻 十三号 P4)
昭和五十六年 KK日本体育社
- 【体育施設・遊具関係】**
- 自然環境を生かした学校体育施設
(体育の科学 十八巻 七号・428)
昭和四十三年 日本体育学会編
 - 体育教材の開発
(学校体育 二十三巻 十一号 P45)
昭和四十五年 KK日本体育社
 - 施設用具のくふうについて
(体育の指導 二十二巻 P1)
昭和四十七年 大日本図書KK
 - 児童遊具施設について―遊びをつくる施設を―
(体育施設 四十号 P2)
昭和四十九年 (財)日本体育施設協会
 - 体育用具を再検討する
(体育科教育 二十三巻 六号 P26)
昭和五十年 KK大修館書店
 - 事故防止のための実践的研究―遊具設計と点検法―
(体育の科学 二十九巻 二号 P116)
昭和五十四年 日本体育学会編
- 【指導研究法その他】**
- 楽しくのびのびと暮そう
(母親教室 三十二号 P20)
昭和三十三年 KK野辺路書店

○体をまもる、体をきたえる

KK野辺路書店

(母親教室 四三―四十四号 P20)

○一九六三年の体育教育界

昭和三十七年

大日本図書KK

(えんぴつ二巻 十一号 P10)

○京都市における小学校を主として体育の研究サークル巡り

(学校体育 二十一巻 一号 P76)

昭和四十三年

KK日本体育社

○サークルでの授業研究の実践

(学校体育 二十一巻 十一号 P58)

昭和四十三年

KK日本体育社

○第五回ジムナストラダに参加して

(体育の科学 十九巻 十号・660)

昭和四十四年

日本体育学会編

○現場研究の紹介 京都市の体育

(学校体育 二十二巻 八号 P86)

昭和四十四年

KK日本体育社

○研究の組織と運営 ―学校における研究体制とその運営

―サークルにおける研究体制とその運営

昭和四十八年

KK大修館書店

【体操指導関係】

○現場で見る徒手体操とその対策

(体育の科学 十二巻 十号・519)

昭和三十七年

日本体育学会編

○徒手体操指導の急所

(中学教育 P165)

昭和四十年

小学館

○現行の徒手体操はこれでよいのか

(学校体育 十八巻 十三号 P32)

昭和四十六年

大日本図書KK

○体操を楽しく行わせるために

(体育の指導 十八号 P11)

昭和四十七年

京都市消防局

○消防体操

(京都消防 二十五巻 八号 P30)

昭和四十八年

大日本図書KK

○体操の活動例

(体育指導資料(一))

昭和五十二年

文部省体育局編

○体操の指導効果を高める施設用具のくふうと活用

(健康と体力 九巻 五号 P20)

その他の著作・考案

映画十六ミリ ○水遊び(文部省選定)

日本綜合映画社製作 京都学校水泳研究会協力

映画十六ミリ ○総合体育遊具での遊び

昭和五十年 企画・指導 安田祐治
京都市教育委員会、KBS近畿製作

映画八ミリ ○第五回ジムナストラダ演技編(四十巻)

昭和五十五年 作成委員長 安田祐治

映画八ミリ ○第五回ジムナストラダ演技編(四十巻)

昭和四十四年 撮影・編集

映画八ミリ ○現代っ子に遊びを

昭和五十一年 撮影・編集

映画八ミリ ○子供の遊びと遊具

昭和三十五〜五十六年 撮影・編集

スライド ○体育施設・遊具施設 約二千枚

昭和四十〜五十六年 撮影

体育施設・遊具の考案設計

【開発・改良の観点】

- 体力・技能の訓練用具から、楽しい遊び用具へ
- 遊びを活性化する機構
- 技術的興味を高める構
- 多数同時使用、集団遊び化の機造
- 多数遊具の組合わせ、運動場の有機化のための
- 全ての施設の移動可能化
- スポーツ用施設の遊具兼用化
- 美的構造と極彩化と使用法の関連化
- 安全構造
- 園児・児童の取扱いの容易化
- 収納のための改善
- 製作費の軽減化

【開発改良した施設・器具・用具】

- 総合的遊び遊具(ジャングラミン)(大型)
- 総合的遊びすべり台
- 遊具兼サッカーゴール兼バスケットゴール
- 三段階鉄棒
- 移動式低鉄棒
- 組み合せ自由とび箱
- 二段分割用とび箱
- カラーマット
- 改良安全移動式ブランコ
- 移動式回転塔
- 児童用改良ハードル
- 体操用ポール
- その他

【設置校・園】

- 総合遊具 幼稚園 京都、長崎 二十余園
- 小学校 京都市、東京都他 百五十校余
- 他の施設・器具・用具 広く使用されているが資料不足

【開発・改良の観点(プール等水泳施設)】

- 学校及び幼稚園での指導用に適したプール(競技用プール一般プールと区別)
- 京都教育大学附属京都小・中学校プール 昭和三十五年
- 京都市教育委員会建設小・中学校プール 昭和三十六〜五十五年

【設計、又は設計指導したプール】

- 泳げない多数の使用するプール
- 水遊びの多様な使用
- 能率化と安全構造
- 学習指導的配慮
- 水遊び用、水泳用具の改良開発
- 上賀茂幼稚園プール
- 深草幼稚園プール
- 家政幼稚園プール
- 長岡京市小学校プール
- 川西幼稚園プール
- 大宮小学校プール
- 高倉幼稚園プール
- 転降幼稚園プール
- 間人小学校プール
- 東養護学校プール
- 学野幼稚園プール
- 向日市立小学校プール

学会発表

○学童の長距離歩走についての研究 第一報三十二km歩走における疲労について

第七回体力医学会総会 研究発表会 昭和二十九年八月 北海道 共同研究者：蜂須賀弘久他

○学童の長距離歩走についての研究 第一報三十二km歩走における疲労について

関西スポーツ医事研究会 第三回研究発表会 昭和二十九年九月十九日 神戸医科大学 共同研究者：蜂須賀弘久他

○学童の長距離歩走についての研究

日本体育学会 昭和二十九年十一月二十三日 共同研究者：蜂須賀弘久他

○学校遊具・公園遊具について

日本体育学会京都支部 第三十三回例会 昭和四十四年六月十四日 光華女子大学 安田祐治

○現代つ子に遊びを

日本体育学会京都支部 第六十一回例会 昭和五十一年七月三日 京都大学 安田祐治

○体育の場に見られる成長発達について 小集団学習における集団意識と態度・行動

日本体育学会京都支部 第六十三回例会 昭和五十二年六月二十五日 大谷大学 安田祐治

○総合体育遊具の開発と遊びの発展

日本体育学会京都支部 第七十三回例会 昭和五十五年十二月六日 京都外国語大学 安田祐治

○体育施設における運動の器具・器材について
主として学校および公園の体育施設・遊具について(講演)
第二十二回全国体育施設研究協議会 昭和四十四年五月二十二日 神戸 安田祐治

海外研修

○第一回体力づくり調査団 自：昭和四十四年六月二十六日〜七月二十日 内閣総理府主催

■第五回ジムナストラダ(世界体操供覧大会)視察研究

七月二〜五日(四日間) スイスバーゼル市

■西ドイツのゴールテンブラン及びスパイダーペーク視察研究

七月六〜十三日(八日間)

西ドイツスポーツ連盟主管のもとに、各地の大学・自治体等の体育館・野外スポーツ場・プール・公園・研究施設を視察。学生・一般市民・幼児・障害者等のスポーツ教室・一般開放スポーツ体操・行事等の参観ならびに研究討議交歓を行う。

■ヨーロッパ各地の体育施設の視察

イタリヤ・オーストリア・スイス・フランス・オランダ・イギリス・デンマーク

○アメリカ・カナダ数学・体育研修旅行

自：昭和五十二年八月十六〜三十一日 日本数学教育学会 日本学校体育研究会連合会

■大学・自治体の体育施設、公園等における遊具の研究

■スポーツ教室・障害者スポーツ大会の参観・研究

○中国(上海・蘭州・敦煌)旅行 自：昭和五十六年九月二十日〜十月二日

■社会体育施設・一般民衆の生活における体育実践の実態

■保育における体育遊びの状況

社会的活動(関係団体等)

○全国体育学習研究会 中央委員 昭和三十七〜五十二年 昭和三年創立

第三回全国大会 副実行委員長 昭和三十四年 会長 松田岩男

第六回全国大会 副実行委員長 昭和三十六年 顧問 竹之下休蔵

第十六回全国大会 副実行委員長 昭和四十六年

○財団法人全日本すもう研修会 上級指導資格者 会長 永井高一郎死後解散

理事 昭和四十一～四十七年

○財団法人日本体育施設協会 専門調査員委嘱 昭和四十六年

○財団法人日本学校体育研究連合会 評議員 昭和五十一年四月～五十三年三月

理事 昭和五十三年四月～五十三年三月

○全京都学校体育研究連合会 会長 昭和五十一年四月～五十四年三月

副会長 昭和四十八年四月～五十一年三月

○京都市小学校体育研究会 会長 昭和五十一年四月～五十三年三月

副会長 昭和四十九年(創立)～五十一年

○京都市小学校スポーツ連盟 顧問 昭和五十二年

○京都学校水泳研究会 発足時 京都市小学校スポーツ教室指導者連絡協議会

代表・会長 昭和三十七年(創立)～五十三年

○京都体操研究会 顧問 昭和五十四年

会長 昭和三十五年(創立)～五十四年三月 発足時 京都徒手体操研究会

○楽しい体操研究会 会長 昭和三十五年(創立)

代表 昭和四十八年(創立)

○学校すもう研究同人 代表 昭和三十五年(創立) 現在休会

○京都体操協会 参与・理事・部長 昭和二十年(創立)

監査 昭和五十四年

○京都シルバースキークラブ 役員 昭和三十二年(創立)

副会長 昭和四十三～四十八年

○財団法人日本体育学会 会長 昭和四十九年

○財団法人京都キリスト教青年会 会員 昭和二十九年～ 但し昭和四十～五十三年の間支部会員

○財団法人京都キリスト教青年会 体育事業委員 昭和四十一年

(京都YMCA) 事業計画、リーダートレーニング等

○京都市文化局スポーツ課主催 「親子の体操」教室 企画・運営委嘱 昭和五十年以来 毎年十月十一月実施

○京都市衛生局保健予防課主管 各保健所実施「婦人健康増進教室」 体操指導の企画・運営委嘱 昭和五十四年以来

○その他、講演・講習・指導・原稿執筆・設計・相談等の依頼に対する活動

競技歴

○西日本中等学校器械体操選手権大会 ジュニヤ一部 団体優勝(京都師範チーム) 昭和十年

○全日本中等学校器械体操選手権大会 低学年の部 団体優勝(京都師範チーム) 昭和十一年

○明治神宮大会兼全日本中東学校器械体操選手権大会 高学年の部 団体三位(京都師範チーム) 昭和十二年

○明治神宮大会兼全日本中東学校器械体操東西對抗競技会 団体優勝(西軍チーム) 昭和十二年

○西日本中等学校器械体操選手権大会 シニヤ一部 団体二位(京都師範チーム) 昭和十二年

○第二回教育祭競技大会 体操の部 団体優勝(京都師範チーム) 昭和十二年

○近畿師範学校体育大会 体操の部 団体優勝(京都師範チーム) 昭和十二年

○全日本中等学校器械体操選手権大会 高学年の部 二位(京都師範チーム) 昭和十三年

○日独交歓京都大会 体操選手の部 個人優勝 個人の部 吊輪二位 昭和十三年

○明治神宮体育大会 体操競技教員の部 京都府代表選手として出場 昭和十七年

○第二回国民体育大会 団体徒手一般の部 二位(京都体操クラブ選手兼監督) 昭和二十二年

○第三回国民体育大会 団体徒手一般の部 四位(京都体操クラブ選手兼監督) 昭和二十三年

○第四～七回国民体育大会 団体徒手一般の部 選手兼監督として出場 昭和二十四～二十七年

○第八～十七回国民体育大会 団体徒手一般の部 監督として参加 昭和二十九～三十七年

以上

巻頭言

子ども達の眼は先生に集中してゐる
先生の眼と口元を覗くのを
そして先生の動きをとらへてゐる

先生が一口言った子ども達を見下ろし
一言一語の言はないのに
ひとりひとりが素早く動いた

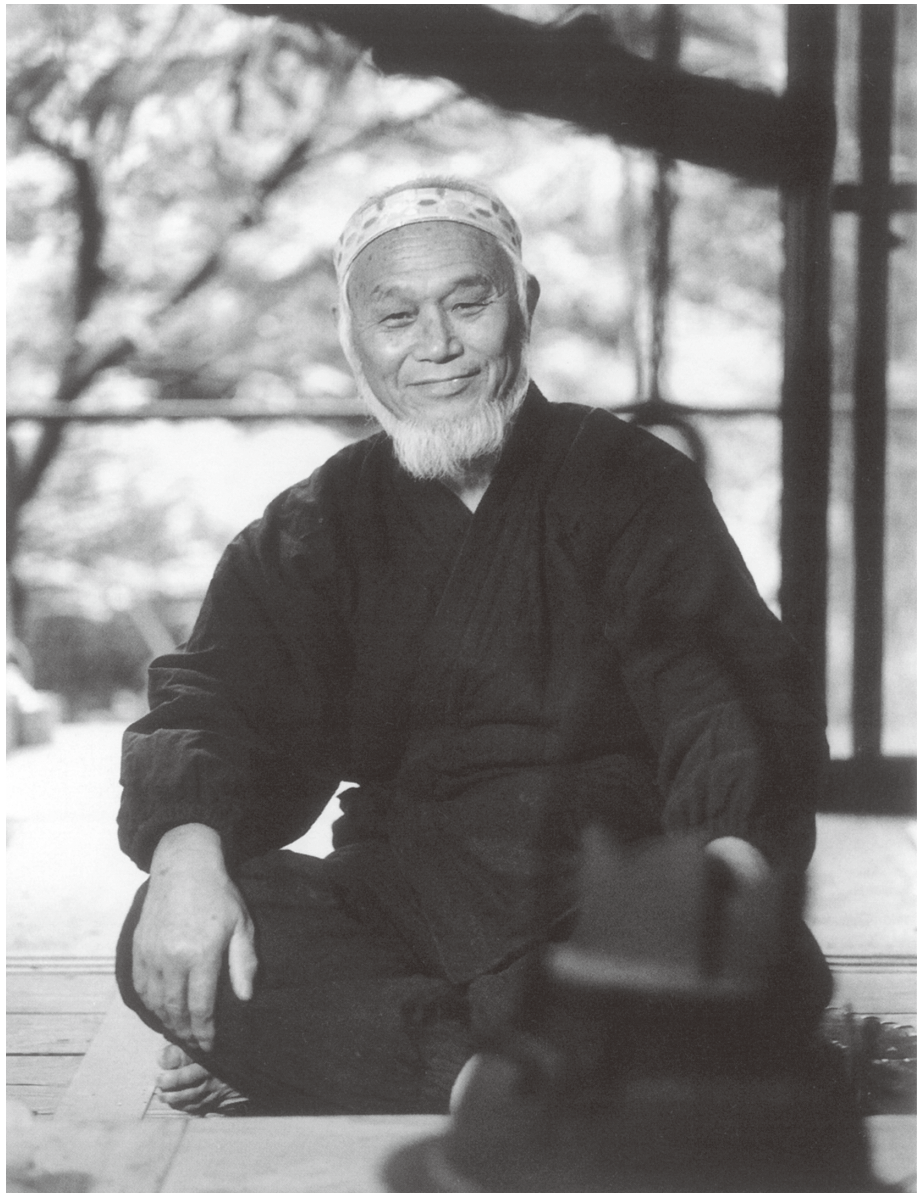
言ふれたがら動いたのではない
待ちかねてゐた言葉だったからだ
ひとことそれだけか念じて
それだけの動きをした
祐

巻頭言

子ども達は信じてゐる
先生の一言が自分達を
ほぐすこととよぼせることと

子ども達は待つてゐる
先生の一言で自分自ら
とび出し走り出すために

子ども達は張り切つてゐる
先生の一言を自分のものとし
自由に広げていこうと
祐



「京都の肖像」百人写真展 平成十二年十一月

巻頭詞

子ども達は 求めぬ
思ひ立つ力を出して
節々もわれぬこと
子ども達は 知るぬ
あふたりの力で動く
遊びが 楽しいことを
子ども達は 小さな手が
力いっぱい遊べることに
一歩ずつ進んでくると
わ

か



本能小学校退職
自ら考案設計したジャングラミングの前で
昭和五十四年三月三十一日

巻頭言
日々楽しい
遊びに熱中
毎日楽しく
遊びで満足
遊びの蓄積
遊びによるこどもは
発育し人間を形成する
所

昭和五十六年八月三日
第九回 幼児の体育遊び講習会の巻頭言
体育遊び研究会



自分で考え自分で走り自分で創り出そう
人の心と知力と念と助け合おう

歩白流法